特21-144
1200500794420
特 21
144

少年武士道

264
759

特21
144

勅諭

朕惟フニ我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ國体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ廣メテ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重ジ國法ニ遵ヒ一

44. 3. 11
内交

旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

御名御璽

少年武士道

目次

嗚呼忠臣……楠正成……一
忠臣は孝子の門より出づ……楠正行……八
行在所の櫻……兒島高德……一六
忠臣の舌鋒……和氣清麿……二三
船坂山の旗擧げ……名和長年……三三
報國盡忠……新田義貞……三五
忠勇敵なし……菊地武光……四一
忠孝の二字……平重盛……四四
恩賜の御衣……菅原道眞……五〇
岩屋の籠城……高橋紹運……五四

龍泉城の旗風……小川傳右衛門……五九
一擧にして衆善聚る……甲賀孫兵衛……六二
耳觸の言葉……杉田壹岐……六五
父母の恩……池田光政・山田古嗣……六九
孝行の模範……松平好房……七二
孝子の一心……龜松……七六
孝は百行の本……鍛冶孫次郎……七九
孝悌の寶……備中甚介……八四
孝の一字よく大義を知る……黒田長政……八八
學德孝道両ながら全し……淺見絅齋……九二
立身出世は孝を本とす……渡邊華山……九四
報德の敎……二宮尊德……九七
蛤の土産……野中兼山……一〇九

才智の効用……熊澤蕃山……一一一
智惠ぶくろ……角倉了以……一一七
積善の餘慶……細川忠興……一二〇
方位の指南者……伊能忠敬……一二三
盛饌に箸を下さず……奧貫友山……一二三
孝悌の子は家の寶……綾部道弘……一二六
智學を以て世人に德す……佐藤信淵……一三一
乞食月仙貧民を救ふ……僧月仙……一三八
敎師に對する敬禮……若林新七及増田鶴樓……一四四
德行の感化……永田佐吉……一四六
不具の人反つて不具を笑ふ……福島の家老と山本勘助……一五一
堪忍袋……大石良雄及平澤某……一五六
禮儀の國……一六三

二士功を讓る……山内治太夫。進士清三郎……一六六
損して德とれ……菴原助右衛門……一六七
儉約と良馬……成瀬正成 及 水戸景山……一七一
慈善の義捐金……橋本松齋……一七五
善行の標本……高島玄俊 及 桑原平七……一七九
少年の公益……中村金臟……一八二
人を愛するは己を愛するなり……青木善七……一八五
軍器の發明……谷水石……一八七
錦の御旗……村上父子……一九二
少年の勇氣敵將を走らす……武田信忠……一九八
一騎當千の丈夫……金子家忠……二〇一
尊嚴の束帶侵すべからず……藤原信賴……二〇四
伊勢の神風……元寇の事……二〇六

危さに臨みて懼れず……吉川元春……二一〇
大勇は憶病に似たり……原田左馬之助……二一三
勇將の舌鋒……加藤清正……二一六
甕破柴田……柴田勝家……二二二
軍人龜鑑……谷村計介……二二五
剛勇の喇叭手……白神源次郎……二二七
石曼子の威名……島津義弘……二三〇
軍人の職分……藤原隆家……二三三
當時の太閤……橋口少將……二三七
日本魂……濱田彌兵衛……二三九
節義は國の元氣……鳥居強右衛門 及 藤原清河……二四一
國恩を忘れず……山田長政……二四四
孔孟を生擒する道……山崎闇齋……二四七

勇士は名を惜む……栗山利安……二四九
萬夫不當の勇士……畑一成……二五三
戰時使者の任務……島田平四郎……二六〇
一命を大義の犧牲に供す……三好淸房……二六三
義勇にして寳器を破る……二六九
忠烈の言利刄より鋭し……本多平八郎……二七三
忠勇至誠鬼神を感ず……畠山重忠……二七九
尊王の大義……梅田源次郎……二八二

少年武士道目次終

少年武士道目次終

少年武士道

谷口政德編纂

○嗚呼忠臣（楠正成の事）

「世間第一に敬すべきは忠臣孝子なり」といふ人として忠孝の道を知らざれば他に徳行ありとも滿足なる人には非るなり我々は此國に生れ忝くも天子の厚恩を受くるものにて君の恩と父母の恩とは吾々が此世にありて受くる所の恩の最も大なるものなり故に父母の恩を思ひて孝行をつくし君の恩を思ひては忠義を盡すべし忠孝の二つは我々

が徳行の最も大切なるものなり我々の祖先は代々能く是に心を用ゐ專ら力を此の二つに盡せしが故に勅語にも「克く忠に克く孝に世々其美を濟せるは」との仰せあり我々も先祖美德を汚さず家に在りては能く孝を盡し外に在りては能く君に忠を盡さゞるべからず

後醍醐天皇鎌倉の執權北條高時の專橫を憤らせ給ひて之れを滅さんとし給ひしが其の謀漏れて鎌倉の大軍一時に押し寄せしかば天皇はこれを大和の笠置寺に避けて勤王の士を集め給へり然るに賴む木蔭に雨もりて御味方に參るものなかりしかば大御心を惱ましたまへり

一夜御夢に紫宸殿の庭と覺しき處に大なる樹ありその南にさしたる枝殊に茂りて下に南面の坐を設けみづから結

ひたる二人の童子涕を流して廣き天の下に此の座を除きては聖体を安んじ奉るところなし

こゝにれはしませと泣く泣く奏するかと思ぼせは御夢覺めぬ天皇思ぼすやう木をもて南に傍ふれば楠といへる文字となる必定楠といふものありて朕を助けて天下の亂を靖むるならんかとて翌朝寺僧快元を召させ給ひて『此の邊に姓楠といふものありや』と問れせ給へば快元『金剛山の西に楠正成と申すものあり幼きときより才智人に勝れ武名隱れなきものなり』と奏す天皇ろの言を聞こし召し藤原藤房を遣はして正成を召させ給ひ『討賊の事は一に卿に委ぬるぞ』仰せて其策を問はせたまふ正成感激して『陛下の御威稜の及ぶところ何れの敵かは靡かざるべき況んや順を以

て逆を討つをや但だ東兵は勇にして謀なし若し力を以て爭はゞ武藏相撲の兵は天下に敵なし謀を以て是を屈せば與みし易きのみされども勝敗は戰の常なれば一旦の勝敗は大御心に掛け給ふことなかれ正成が未だ死せずと聞こし召さば御心安くおはしませ』と勅答して退出したり實に元弘元年八月なりき

斯て正成は赤坂に城を築き天皇を爰に迎へ奉らんとせしが城未だ完からざるに笠置山落ち天皇は隱岐に遷りたまへり正成僅かに五百人を以て赤坂を守り屢ば賊兵を苦しめたりされども糧食乏しくして支ふること能はず終に城を棄てゝ金剛山に匿れしが幾くもなくして赤坂を復し千早に城きたり

既にして賊の大軍再たび赤坂を陷し破竹の勢ひに乘じて千早を圍む正成百方奇計を廻らして巧みにこれを破りしかば賊大に苦しめりたま〳〵新田義貞上野に起りて鎌倉を亡し天皇は隱岐の島を逃れて伯耆に行幸したまひ官軍の勢日に盛んなりしかば千早の圍み解け天皇は京都に還御あらせらる正成兵を率ゐて兵庫に迎へ奉る天皇大に悅ばせたまひ大業の速かに成れるは實に卿が力なりと親しく勞はせ給ひ前驅を命して京に入り給へり

後足利尊氏の叛くに及び正成また奇計を以て屢ばこれを敗り遂に尊氏を西海に走らしたり正成義貞に勸めて急にこれを追はしめんとしゝに義貞從はず尊氏遂に九州の大軍を率ゐる再び京師に攻め上りたり正成策を獻じ車駕を山

門に移し奉り賊を京に入れ暫らくその氣勢を挫き而して後にこれを攻め亡ぼさんことを以てす藤原清忠これを妨ぐ正成止むことを得ず弟正季等と闘を辞し櫻井驛に至り子正行に諭して曰く『今度の戰はまことゝ天下安危の決する所なり若吾死なば天下は必ず尊氏の手に皈せむ汝私の利のためゝ忠義を忘るゝ勿れ必ず身を國に殉し死に至るまで屈すべからず汝が孝はこれに過ることなし』即ち寶刀を授けて河内に皈らしめ死を決して湊川に赴きたり

既にして賊軍海陸より幷び進むその勢凡そ八十万正成は僅か七百の兵を以てこれに當り縱横に奮戰して敵を苦しめしが敵は大勢にて味方は小勢なり加之朝より夕まで十六度の戰にて生き殘りしものの僅かに七十三騎となりしか。

ば湊川の北なる農家に馳せ入り弟正季とさし違へて死す之れに續きて一族郎黨七十餘人皆共に自殺す時に正成年四十三天皇聞召し大に哀悼し正三位佐近衛中將を贈らせ給へり後源光國碑を湊川に建て嗚呼忠臣楠氏の墓といふ明治に至り神社を建て別格官幣社に列し更に正一位を追贈したまへり正成が遺訓の歌に曰く

建武の昔正成は　肌の守りを取り出し
是は一歳都攻の有し時　下し給ひし綸旨なり
之を汝に讓るなり　我れ兎に角になるならば
世は尊氏の世となりて　叡慮を惱し奉らんは
鏡にかけて見る如し　さは去り乍ら正行よ
父の子なれば流石ゝも　忠義の道はかねて知る

弓張月の影暗く　家名を汚すこと勿れ
打洩されし郎黨を　あわれみ扶助し隠家の
吉野の山の奥深く　月の桂は漣や
流れも清き菊水の　旗を再び飜し
敵を千里に退て　叡慮を慰め奉れ
嗚呼叡慮を安んじ奉れ

○忠臣は孝子の門より出づ（楠正行の事）

古人曰く「忠臣は孝子の門より出づ」と忠臣にして孝子ならざるものなし孝子にして忠臣ならざるものなしこの父にしてこの子ありとは實に楠公父子のことなるべし楠正行は正成の長子なり櫻井驛に於て父正成に別れし時年十一

歳なりしが正成湊川にて討死せしかば尊氏その忠節に感じて首を河内に送りたり正行は父の遺言を受け涙を揮て故郷に皈りしが今父の首の生きたりし時にも似ぬ有樣を見て流るゝ涙を袖に押へて持佛堂の方へ行きたり母怪しく思ひて妻戸の方より行き見れば父が湊川へ向ふ時形身に留めし菊水の刀を右の手に拔き持ち袴の腰を押し下げて既に自殺せんと搆へ居たり母驚きて走り寄り正行が小腕に取り付きて涙を流して誡めて曰く『栴檀は二葉より芳しと云へり汝幼くとも父の子ならばかばかりの理に迷ふべからず能く能く事の樣を思ひて見よ父の汝を櫻井の驛より還し賜へるは全く亡き跡を吊はせん爲に非ず腹を切れとて殘し置きしにも非ず我假令運命盡きて戰場に命を

失ふとも君何處にも御坐ありと承らば生き殘りたらん一族郎黨を扶持し置き今一度軍を起こし朝敵を滅ぼして君を御代に立て參らせよとのためなり汝まのあたり遺言を承り還りて我に告げたるその舌未だ乾かざるに汝先づ忘れたるか斯くては父が名を失ひ果て君の御用に立つべしとも覺えず』と泣く泣く諫め止めて拔きたる刀を奪ひ取れば正行腹を切り得ずして禮盤の上より泣き倒れ母と共に悲み嘆きけり

その後正行は父の遺言母の教訓心に染み肝に銘じ或る時は竹馬に鞭ちて是は尊氏を追ひかくるなりといひ又は童子を打ち倒し首を取る眞似をして是は朝敵の首を取るなりといひ斯る遊戲に至るまで只この事のみを心懸け居たり

後醍醐天皇花山院を逃れ出でゝ大和に行幸したまひし時正行馳せて之れに赴き車駕を護衛して吉野に入る後村上天皇立ちたまふに及び正行屢ば兵を出して賊軍を破りしかば尊氏これを憂ひ高野師直師泰をして大軍を率ゐて來り攻めしむ正行弟正時と行在所に詣り奏請して『曰く先臣正成微力を振ひて強賊を挫き先帝の宸憂を安じ奉りたり然るに天下また亂れ逆徒來り犯して遂に命を湊川に效す當時臣未だ幼く偏に父の遺訓を守りて故鄉に皈り族黨を扶持して國賊を討ずることに志せしに今既に長じて此度の大敵に遭へり若し此の時を失ひて一旦不測の疾にかゝらば上は不忠の臣となり下は不孝の子となるべし此の一

戰は眞に臣が命を效すべき秋にして臣若し彼が首を獲ずんば彼必ず臣が首を獲ん唯願くば一たび天顏を拜し奉りて後に行かん』と天皇高く御簾を捲かせたまひ正行を近く召し懇ろに勞りたまふ正行感泣して出で先帝の御廟を拜し族黨百四十三人の姓名を如意輪堂の壁板に記し更に

かへらじとかねて思へば梓弓
なきかずにいる名をぞとゞむる

と一首の歌を付し進んで四條畷に向ふ師直八万を以てその後に陣す正行兵三千を以て直師の陣を突き左右前後に敵を受け奮戰すること半日にして三十餘合殺傷數百人に及ぶ正行の兵また多く戰死し餘すところ三百騎となれり正行箭を被ること蝟の如くその爲すべからざるを知り遂に

に正時と相刺して死す正行時に年二十三從兵悉くこれに死せり「斃れて而して后止む」とは正行のことなるべし當時正行が行宮を辭せし心事如何ならむ後人これを詠じて曰く

正平四年正行は　吉野の皇居に參內し
四條の隆資卿を經て　心の中をぞ奏しける
先臣正成勤王の　軍を起し朝敵を
打滅ぼして先帝の　叡慮を休め參らせし
其後天下又亂れ　逆臣尊氏筑紫より
都をさして攻上り　正成覺悟や定めけん
終に津の國兵庫なる　湊河にていさぎよく
戰死をこそは遂げたりき

其時正行漸くに　十一歳になりぬるを
軍の場へは伴はで　河内へ送り皈しつゝ
敵を亡し我君の　御代になせよと細々に
遺し訓へし言の葉は　今尚耳に留まれり
然るに正行今は早や　年も壯となりぬれば
今に及びて朝敵を　打亡さで過しなば
いつをか待ん人の身は　思ふに任せぬ習ひにて
病の爲に死しもせば　君の爲めには不忠なり
父の爲には不孝なり
されば此度師直と　手痛き軍仕り
彼が頭を正行が　手に打取るか正行が
頭を彼に取らるゝか　二つの中に戰ひの

雌雄を定め申すべし
今度の軍正行が　必死の覺悟に候へば
今生にては今一度　龍顏拜ませ給はれと
申しも敢へず涙をば　鎧の袖に注ぎつゝ
義心氣色に見ゑたりき
天子御簾を揭けさせ　近く召されて正行よ
此程數度の戰に　敵の勇氣を摧しは
叡慮を慰するに足るぞかし
父子累代の勳功は　深く感ずる所なり
朕は汝を股肱さす　必ず命を全ふし
國家の重きに任せよと　畏き詔ありければ
正行頭を地に着て　是を最期の參内と

思ひ定めて退きぬ
斯て一族郎黨と、後醍醐帝の御陵へ
參りて御暇申し上げ　如意輪堂の壁板に
各々名字書連ね　又其奥に皈らじと
兼て思へば梓弓　なき人數に入る名をば
記し留むる鏃もて　一首の歌を書き殘し
芳野を出て勇ましく　四條繩手に向ひける

○行在所の櫻

「山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも」とは君の恩を忘れず忠義を盡すべきことを讀みたる歌にて高き山の裂けて平になり深き海の淺くなりて干潟

となることとは世にあるべしとも思はれず假令左る變事のある世にても此身が君に二心を懷かずして忠義を盡さんと思ふ心は決して變ることあらじと誓ひたるなり備後三郎の忠義はこの歌に比ぶべし

兒島高德は備後の人なり備後三郎と稱す高德夙に學を好む後醍醐天皇の笠置におはせしとき父範長と共に王事に勤めんことを謀りしが笠置既に陷り楠公も亦敗れしと聞きて止みぬ既にして北條高時天皇を隱岐の國に遷し奉らんとすと聞き一族家人を聚めて議して曰く『吾聞く志士仁人は生を求めて以て仁を害することなく身を殺して以て仁を成すことありと義を見てせざるは勇なきなりと吾車駕を途中にて奪ひ奉り義を擧げんと思ふなり』といふ一同勇

んで之に從ひたり斯くて舟坂山こそ事を濟すに便なりと衆と共に彼處に隱れて待ちしが久しく時過ぐるまで其の沙汰なかりしかば人を遣りて候はせしに護送の兵轉じて山陰道に向ひしと聞き道もなき山坂を踏み越えて辛くも杉坂に至りしに此處をも早や過ぎ去り給ひしかば衆皆力を落し散々に失せ去りぬ

高德遺憾に堪へず服を變じて車駕の跡を追ひ折もあらば己が勤王の志を一たび天皇に聞え上げんと思ひしかよき折もなかりしかば夜にまぎれて院の莊の行在に忍び入り庭なる櫻の樹を削りて

天莫レ空二勾踐一　時非レ無二范蠡一

と云ふ二句の詩を書き付け心を殘して立ち去りたり是は

昔支那國に越といへる國に勾踐と云ひし王あり吳の國の王夫差と領分を爭ひ軍に負けて降人になりたりしに范蠡と云ひし臣終始忠を盡し勾踐が赦されて本國に皈りし後力を合せて遂に夫差を滅ぼしゝことあれば高德その故事を思ひ出でゝ陛下假令ひ勾踐の如き憂目を見給ふとも臣及ばずながら范蠡の如き忠節を盡し奉らんとの心なり翌朝に至り護衛の士之を見て天皇に云々と奏しければ天皇頓て親しく叡覽あらせられ猶ほ忠義の者朕を助くるものあるなりと竊かに悅び給へり

後伯耆の人名和長年天皇を奉じて船上山に旗を擧げし時高德疾く馳せ參じ又源少將忠顯に從ひ六波羅の討手に向ひしが忠顯謀なくして勝利を失ひ諸道の官軍敗れ退きた

りされど高德は獨り一條より攻め入り賊將陶山河野等と戰ひて軍を全ふす忠顯峯の堂に陣し三郎を召して『今官軍新に敗れて大敵近きに在れば先づ引き退きて其鋒先を避けんと思ふ如何』と問ふ高德對へて『勝敗は互にあるものにして赤松が兵は二千に足らぬ小勢にて屢ば京都に戰ひ敗るゝことあれども尙ほ山崎に本陣を据へて動かず然るに我軍此度利を失ひたれども敵に一倍する軍勢を有せり敵寄せ來らば山を後にし川を前に當てたれば兵道に叶へり高德こゝにて支へ申さん』と桂川の西に陣を張り敵寄せよと待ちたりしに忠顯これを危ふみ竊かに落ち行きしかば一軍主將を失ひ皆散り散りになれり高德切齒をなして怒りしかど詮方なく殘兵を集めて丹波の高山寺の城に籠れり

ろの後建武の亂に及び所々に於て軍功ありしが足利尊氏九州の兵を師ゐて攻め上りし時山陽道の者共之に應ぜしかば新田義貞これが征伐に赴きたれども敵地のことなれば通路自由ならずして舟坂に陣し空しく日を經たり高德使を遣りて舟坂の要害は比類少き所にして一騎これを支へば萬騎も過ることは能はず如何にこれを攻め給ふとも詮なし某謀を運すに是より手勢を以て熊山に押登り倍す進む狀をなさば賊其人數を分ちて必ず某に向はん其時御手の兵を二手に分ちて一手は舟坂を攻め一手は三つ石の南より搦手に回りて急にこれを攻め給はゞ敵前後の途を失ひ落城すべし既に舟坂を取り給はゞ中國筋には敵對する

ものなかるべしと云はれたり義貞大に悦びて其時を約束せり

既にして高徳熊山に登り旗を擧げしかば賊軍果して來り攻む高徳防戰終日に及び創を受けしが事ともせず烈しく戰ひて敵を追ひ却けしかば脇屋義助此の間に乘じ作州に入ることを得たり然るは足利勢は雲霞の如く攻め入りければ支へかね義助を三つ石を棄てゝ退去せり高徳は父範長と共に義助に追付んとせしが創痛みて從ひ難かりしかば途中に止まりて療治せり

是れより範長は獨り播州に至りしに赤松則村が軍勢と出合ひ奮戰して遂に死せり其の後高徳は義貞に從ひて南朝の爲めに力を盡し義貞討死の後は又義助の手に屬して四

國に渡り兵を起さんとせしに義助亦卒せしかば詮方なく兒島に皈り義助の子義治を守立て志を遂げんとしたれども意の如くならず潛かに京師に入り忠義の士を集めて尊氏を討たんと狙ひたりされどろの隙なくして果さず事顯はれたり是れより又義治を伴ひて信濃に奔り一生志を遂ぐることなくして卒せりされど「古より忠臣義士は生を捨てゝ義を取り身沒して而して名存す」との芳名は櫻花と共に千載に殘りたり高徳老年の後髮を削りて志純と號し詩文を巧みにす今に至るまで傳はれるもの少なからず明治の御世に從四位を贈りて吉野山に祭られたり

○忠臣の舌鋒（和氣淸麿の事）

身命を鴻毛より輕んじ一言の下に皇室を安じ奉り千載の後まで永く非望を懷ものなきに至らしめたるは實に和氣清麿の蹟しなり

和氣清麿は備前の人なり性質剛毅にして忠誠の志あり其姉廣蟲と共に孝謙天皇の朝に仕へ奉り行ふところ總て誠意に出でざるなく共に寵信を蒙る既にして天皇落飾したまひ廣蟲も亦出家して法均尼と稱す時に僧道鏡と云ふものあり天皇深く之を寵したまふ依りて道鏡は寵を恃みて專橫甚しく位人臣を極め太政大臣禪師と稱し政大小となく皆己れに處決し出入は乘輿を用ひ服飾は天子に擬へり當時の名臣と聞ゑたる藤原百川すらもその鼻息を仰ぐに至れり

時に太宰府の主神をつとむる中臣禰宜阿曾麿といふものあり道鏡の意を迎へて幸ひを得んと欲し神の教へなりと矯り奏して『若し道鏡をして天位に即かしめなば天下は自から泰平ならん』と申す天皇もさすがに思ひ惑はせ給ひ日頃信任したまへる和氣清麿を召して詔はく『道鏡の事につき昨夜夢に八幡大神の使來り大神汝が姉法均によりて告げたまふとあらんと宣ふ然るに法均は女の身にて遠路に堪へ難し故に汝宜しく速かに往きて神教を請ふべし』清麿拜辭して退きしに道鏡は目をいからし劍を案じて清麿に謂て曰く『汝我をして天位に登らしめば汝に授くるに太政大臣を以てせん否らざれば重科に處せん』と是れより先き清麿の親友路豐永道鏡の師たり清麿出でゝ

途に豐永に遭ひしに豐永語りて曰く『道鏡若し天位に登らば吾は二三子と伯夷に從つて遊ばんのみ』といふ伯夷は支那國殷の賢臣なりしがその君紂王を諫めて用ゐられず殷遂に滅びて周の世となりしかば周に仕ふるを愧ぢて首陽山に隱れし人なり清麿素より決心する所あり豐永に謂て曰く『以て意となすこと勿れ』と慨然死を誓て行く

清麿宇佐に詣り幾くもなくして京に皈り神教を奏して曰く『我が國開けてより以來君臣の分既に定まり萬世變ずることなし道鏡何者ぞ君臣の大義を忘れ敢て神器を望まんとするの罪許すべからず速かに誅戮を加へよ』と正氣堂々更に憚る色なし道鏡大に怒り清麿が神教を詐りしといひて姓名を別部穢麿と改めて大隅に流し法均を還俗せしめて名を狹蟲となし備後の國に流す

既にして道鏡又人を遣はし流配の途にて清麿を殺さんとせしにたま〳〵天色俄かに冥く風雨打ちしきりて使者刑を行ふこと能はず天皇もさすがにあはれと思召し勅使を馳せてこれを止められしかば僅かに死を免るゝことを得たり時に神護景雲三年なり時に參議藤原百川深く清麿の忠烈を憫み備後の封二千戸を割てこれに與ふ

明年清麿配所より上書して神託三條を奏すその皇室を思ふの深きを見るべし時に天皇道鏡の第に幸し數日止まらせたまひしが急に病みて崩し給へり光仁天皇即位したまひ前代以來の弊政を悉く革めたまひまづ道鏡を貶して下野に流し清麿法均等を召還し大に賞罰を嚴にしたまふ清

麿は和氣朝臣を賜ひて本位に復す而して道鏡は配所に死せしかば庶人の禮を以て葬らる世人以て因果應報の然らしむる所となす桓武天皇延暦十八年清麿薨ず明治維新の後正一位を贈り別格官幣社に祀らる護國大明神乃ち是れなり古人が「君臣の大分を明かにし天下の大義を識り死を守りて變せざれば斯れ之を義と云ふべし」といひしは即ち清麿が忠義を謂ひしなり編者が和氣朝臣の歌に

一天四海をしろしめす　孝謙帝の御宇なりき
弓削の川霧立れほひ　天日影も暗くして
あやめもわかぬ世と也ぬ　太宰の主神阿曾麿は
神の教へと僞りて　皇の寵臣道鏡を
天位に即かさめ給ひなば　天下は泰平無事なりと

諂びへつらふて奏しける　皇も惑はせ給ひけん
日頃信任なし給ふ　和氣の清麿召し給ひ
汝遙けき路ながら　宇佐八幡に使して
神勅承けて來れよと　いとも畏き勅命
天日嗣の絶えなんも　將た變らぬも此の時と
思案定めて退去ける　心も黒き墨染の
袖ひるがへして道鏡は　清麿待てと呼止めて
劍に手をかけいひけるは　汝清麿よく聽けよ
我を天位に即かせなば　汝を重く用ふべし
若し我か言に背きなば　只一打にきり倒し
不臣の輩を懲さんと　威しつくれど清麿は
いとゞ切なき胸のうち　悲憤の涙れしかくし

駒を早めて馳せ出でぬ
生死を共に誓ひたる
眞人は腕をなでさすり
我は御身と諸共に
皇國の爲と君の爲め
清麿眞人が手を執りて
神の稜威をいたゞきて
一心凝たるその時は
事成らずして死すとても
死て甲斐ある者なれば
さらばといひてうつ鞭の
行方も知らず白雲に

誰にか心夕まぐれ
わが友眞人に出會たり
奸僧天位に即くならば
死して忠義の鬼とならむ
つとめ給へと勵ませば
我兎に角にあるからは
皇國の爲めに盡すべし
石にも矢の立ためしあり
忠義の爲に死する身は
死すとも更に恨みなし
音こそ耳に留れども
影さへ見えずなりにける

見送る人と送らるゝ
心の中は如何ならむ
清麿宇佐より皈り來て
我が國開闢の昔より
天日嗣は皇ぎの
神器を窺ふものあらば
神勅此の如くなり
憚る色なく奏上す
鐵石さへも透すべく
鬼神とても泣かんめり
思はず顏を見合せて
心苦しき風情なり

心の中は如何ならむ
いと謹みて奏すらく
君臣の分定りぬ
御系統をば立て給へ
とく／＼誅を加ふべし
叡慮を定め給へよと
その舌鋒の鋭さは
その忠烈の心には
雲井にゐながる公卿達も
なんと岩間の岩つゝぢ
斯と見るより道鏡は

烈火の如く怒り立ち　己れ清麿神勅を
偽り奏すは奇怪なれ　いで其儘に置くべきぞ
汝の姓も汚がらはし　今より穢部と名乗よと
心も清き清麿に　汚名をつけて大隅に
流配せしこそ悲しけれ　君に心を筑紫潟
なみのまに〳〵流れ行く　旅にしあれば駒さへも
進み兼てぞ断へつゝ　降しく雨の絶間なく
雷さへも鳴り渡り　尚ほ奸僧が巧みし
討手の者も進み得ず　皇も憐れと思召し
勅命して止め給ふ　僅かに虎口は免れしも
濡衣塚の濡衣　吾身に着たる心地して
配所の月を打ち眺む　心の底ハ如何ならむ

いつか雲霧晴渡り　濡衣干してあや錦
かざる都の春景色　旭日に匂ふ櫻花
これ大夫の心ぞと　譽る其名は芳しく
天地と共に盡ぬべし　天地と共に盡ぬべし

○船坂山の旗揚げ（名和長年の事）

我國は開闢の昔より君臣の分定りて君主は仁慈に在し代々の臣民は忠節を勵の美風あり而て吾等臣民は代々君恩を蒙たる者なれば有事の時は身命を抛て忠勤を勵ざる可らず

元弘中後醍醐天皇隱岐の國より海を渡りて竊かに伯耆國に着せられうの國の豪族名和長年に依り給ふ長年勅を受て感激し即ち一族と共に天皇を奉じ船上山に據て義兵を擧け糧食を運び白布を以て旗幟となし煤烟を以て近國諸

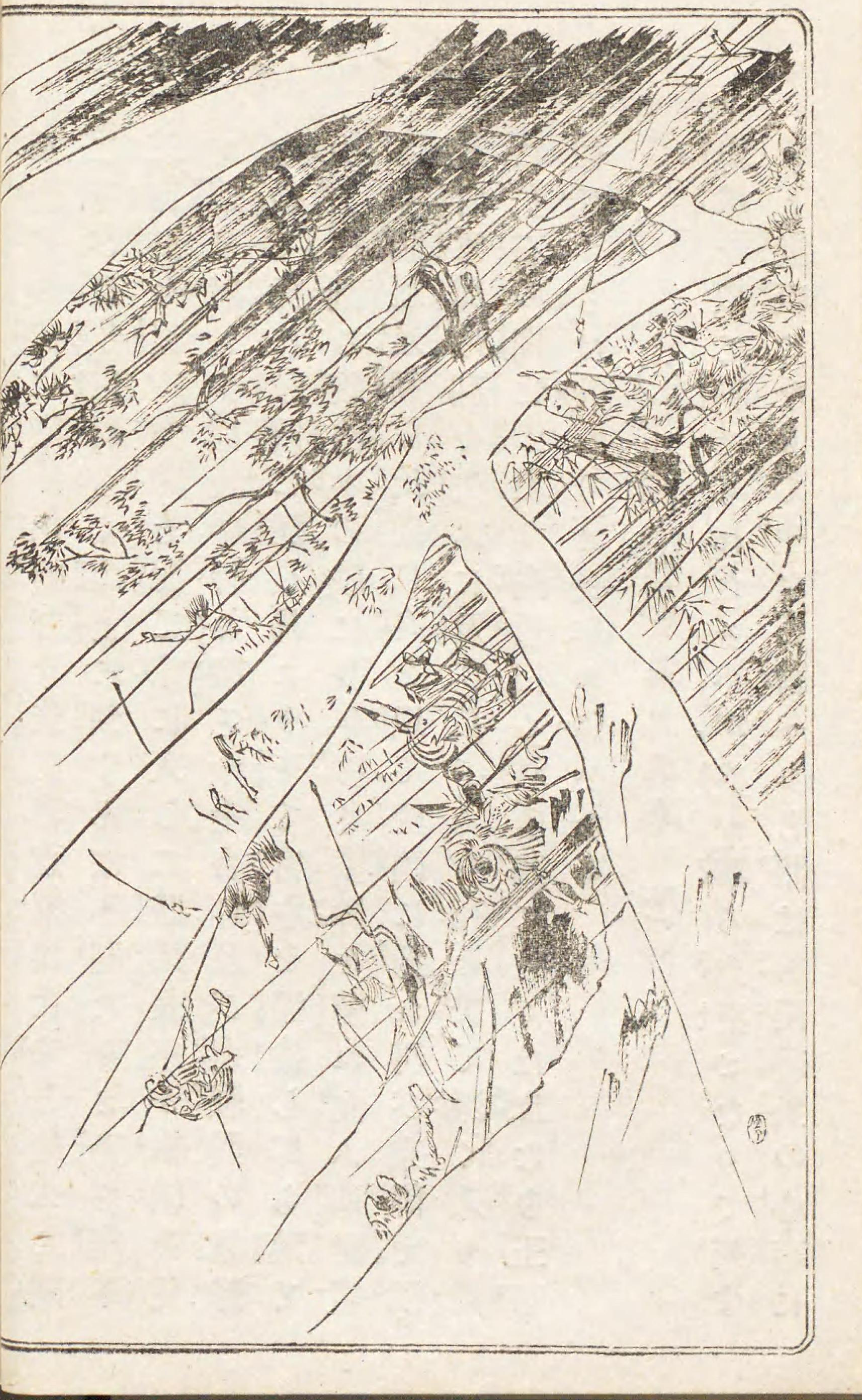
豪の旗號を畫して疑兵を張る威風頗る凜々たり
翌日隱岐の大守佐々木清高兵三千を率て來り船上山を犯しが忽ち山上の旌旗を望見て近國の兵既に來り會せりとなし怖て輕々敷兵を進ずたま〳〵大雨降りて迅雷烈かりしかば清高の兵雨を避んとせしを長年窮ひ知り弟長重長生等と壯士百余人を從へ大に呼で馳下しかば賊兵亂て悉く深谷に陷り清高僅に身を以て免る既にして山陰山陽兩道の兵期せずして聚り是に於て源忠顯及び長年の子義高等を遣して京師を回復せしむ天皇長年に宣く『朕の隱岐を出る舟なくんば何を以てか海を濟ん卿それ舟を以て徽號と爲せ』と乃ち親ら帆舟を畫き給ひて之に賜ふ北條高時誅に伏て兵亂熄に及び天皇長年が功を賞して因幡伯耆兩國に封じ給り其後幾もなくして建武の亂となり長年乃ち賊

を勢多の橋に禦ぐ山崎守を失て車駕叡山に幸し給ふと聞に及び長年以爲らく山上に到ずんば不利なりと乃ち麾下三百騎を從へ敵陣を犯て京に入しに賊兵長年が旗幟を見て遮り射しかば長年行々戰こと十七合に及び連戰賊の諸隊を破て竟に禁闕に達し馬より下て宮中を巡撿し即ち馳て山上に到る後洛中の戰に長年多く堅陣を陷れ向ふ所勳績あり賊魁足利尊氏遂に西國に遁れ再び京師を陷れ官軍屢ば利を失ふに及び長年乃ち死を決て深く入り遂に矢石の間に斃たり先哲曰く「君の難に赴くは忠なり王事に死するは義なり」と長年の謂ひなり

○報國盡忠（新田義貞の事）

忠孝を以て稱せられたる平重盛が「寧ろ忠臣となりて死するも逆臣となりて生じ」と言へりし語は新田義貞の心事に

移すべし新田小太郎義貞は上野新田郡の人にして源義家十世の孫なり後醍醐天皇の兵を擧げたまふや護良親王の令旨を蒙りて義兵を上野に起しゝが越後の一族を始め甲斐信濃の源氏一時にろの手に加はり進んで武藏野に至りしに四方より馳せ加はる者多く總勢二十萬騎と號す北條高時これを聞きて櫻田貞國長崎高重の兩將に六万騎を帥ひて之を迎へ戰はしめしが籠手指原の一戰利なく分倍野に引退きたり高時弟泰家に十万騎を加へて赴き援けしめしかば義貞戰利なくして堀金に引揚げたり然るに三浦義勝が謀により又進みて鎌倉勢を攻む泰家等油斷して大に敗走せしかば義貞此の機に乘じて追討し鎌倉に押寄せ三手に分れて攻め入り一日一夜にして六十五戰に及びたり。



新田の一族大舘宗氏は極樂寺口の大將として攻め入りしに鎌倉の勇將本間手痛く防戰せしかば終に討死したり義貞之を聞き自ら精兵を帥ゐる夜る間道に循つて極樂坂に赴く賊兵數万固く坂上を守り柵を列ねて蹊路を絶ち多く戰艦を列ねしかば軍輙く過ぐることを得ず義貞乃ち馬より下りて海に臨み冑を免で伏し拜み佩ぶる所の金裝刀を解きてこれを海中に投す曉に及び潮退きしかば義貞大に喜びて一齊に鎌倉に入り火を放ちてこれを攻めしかば高時一族と共に自殺し北條氏遂に亡びたり依りて戰捷を伯耆の行在所に奏聞せりされば義貞の軍功比びなく世ゝ聞ふるに至れり然るに幾くもなく足利尊氏直義兄弟鎌倉に據て叛しかば朝廷義貞を大將軍節度使として尊氏を追討せ

しむ義貞官軍を帥ゐて馳け向ひ矢矧鷺坂手越の戰に於て連戰皆勝ち箱根竹下に直義と戰ひし時官軍利あらざりしにたま〳〵朝廷義貞を召されしかば止むなく京師に引揚げたり是に於て天下の武人爭ひ起ちて尊氏に應ぜり
延元元年尊氏直義義貞を追跡して京都に迫る義貞名和長年楠正成等の諸將と共に之を拒ぎしに終に利を失ひ天皇を扶け參らせて叡山に據れりたま〳〵北畠顯家陸奧より大軍を起して後援せしかば義貞之れに力を得て正成と謀り賊軍を攻め遂に尊氏を筑紫に追ひ下せり朝廷其の功を賞せられ左中將に任ぜらる幾ばくもなく足利兄弟九州より再び攻め上ると聞えしかば義貞に詔して征伐せしむ賊軍海陸二手に分れて攝州兵庫まで來りし頃義貞は迎へて

海手の賊を防ぎ正成は陸手に當り必死に戰ひしが賊軍勢ひ強くして正成は遂に戰死し義貞も亦苦戰したれども敗北して皈洛せり天皇また賊を避け給ひしに尊氏隨てこれを圍む後ち尊氏天皇を誑き奉り鳳駕京都に還御あり此の時義貞密詔を蒙りしかば皇太子を奉じて北陸道に赴く路大雪に遭ふて進む能はず漸く越前の金ケ崎の城に入りしに幾くもなく尊氏の兵此の城を攻む義貞脇屋義助と潛かに忍び出で丶杣山の城に入り越前の賊軍を討ちて多くの城寨を下したり依りて足利の一族尾張守高經義貞を攻め大に戰ひしが高經敗走して官軍復び勢を得たれども幾くもなく四方みな賊の領する所となれり

後ち義貞越前足羽の城を攻めて苦戰せし時僅か五十騎[illegible]

て進みたり中野某これを諫めて『千鈞の弩は鼷鼠の爲め尊發せずと聞く今は大將の自ら出で給ふ所にあらず』と云ひしも義貞曰く『大將たらん者多くの士卒を亡ひて身を免る丶事あらん』と猶ほ進みて流矢に中る義貞乃の起つべからざるを知り自ら刎ねて死す賊軍見て誰なることを知らざりしが錦の嚢に詔書を入れ襟に掛けたるにて始めて其義貞たることを知りしといふ明治維新の後ちの精忠を追賞し正一位を贈り別格官幣社に列し藤島神社と稱せられたり

○忠勇敵なし（菊池武光の事）

支那國宋の忠臣岳飛の言に曰く「國の厚恩を荷ふ者は忠義

を以て國に報ゆべし」と移して菊地武光の忠勇に較ぶべし
菊地武光は武重の子なり相繼ぎて肥後の國を保てり曾て征西將軍懷良親王を推戴して勤王の大義を唱へ屢ば義兵を擧げて大業を興復せり正平年中賊足利尊氏の將一色直氏を擊ちて之を走らしめ遂に九州の地を收復せり獨り畠山某三笠城を守りて下らざりしかば武光自ら兵を引き境を越えて之れを伐つ時に少貳賴尚大友氏時等相謀り兵を揚て後ろの後を塞ぎたり武光意となさす進み攻めて畠山を走らしめ還り擊ちて九城を下せしかば敵大に懼れて敢へて出でず道啓けて肥後に皈ることを得たり
既にして武光又八千騎を發して征西將軍懷良親王を奉じて少貳氏を伐つ少貳歩騎六萬を以て筑後川に迎へ戰ひし

に武光兵を進めて奮戰し大にこれを破り首を斬ること三千二百餘級少貳走りて寶万ヶ嶽を保つ其明年武光又征西親王を奉じて少貳大友等を伐ちしに少貳大友香椎に迎へ戰ひ敗れて走れり武光勝に乘じて北ぐるを追ふこと三十里屠殺殆んど殲せり其明年尊氏足利氏經をして探題となして豐後に到らしむ武光これを聞き族菊地某をして兵五千に將として之を伐たしめしに氏經少貳大友が兵を以て長者ヶ原に軍せり菊地某與に戰ひて創を被り某の軍少しく却きしかば敵勝に乘ぜんと欲せしが某兵を進めて橫擊して大にこれを破り氏經以下悉く走る遂に少貳の二弟を殺し首を斬ること凡そ四百餘級時に武光自ら三千騎に將として來りて菊地某が軍に就きて氏經を豐後の府に攻

む氏經等時に兵七千を擁せしも三軍氣沮みて一も戰ふ意なし遂に氏經大友は高崎の城を守り少貳は岡城を保ち宗儀は宗像城に入る武光豐後の府を屯し三城を隔て丶旦暮に之を攻めしかば氏經竟に城を棄て丶遁る是に於て武光の英名西州に轟けり

○忠孝の二字（平重盛の事）

忠とは何ぞ君の恩に答へ奉りて臣民たるの本分に盡すをいふ孝とは何ぞ父母の恩に答へて子たるもの丶本分に盡すをいふ忠と孝と二つなるべからず故に父母に仕つて孝なるは君に忠なり君に事へて忠なるは即ち父母に孝なり即ち「忠孝の道を勤むるは人道の大節なり」

小松內大臣平重盛は太政大臣淸盛入道淨海の嫡子なり性質親に似ず忠孝の心深く言寡なくして常に勇を內に沈め少しも顯位に高ぶらず驕を愼み人を愛せしかば上下皆望を屬したり父淸盛暴橫にして動もすれば言行道に違ふと多かりしかば重盛常に之を憂へ或は顏色を和らげて之を諫め或は直言して其無道を止めたり

時に大納言藤原成親常に近衛大將とならんことを望みしに淸盛の計らひにて其子宗盛に超られしかば心平かなる能はず北面の武士多田藏人行綱平撿非違使康賴西光法師法勝寺の執事俊寛僧都等凡て平家の專橫を憎む輩と謀り鳥羽法皇に逼りて院宣を蒙り鹿ヶ谷の俊寛が別莊に會して事を計る法皇も亦之れに臨まんとし給ひしが少納言信

西の子靜憲の諫めによりて止み給へり後行綱志を變じて之れを六波羅の清盛に告しかば事遂に露顯して之れに與かる者皆捕へれら成親は備前に流され康賴俊寛は鬼界ヶ島に流されたり然れども清盛の怒り尚ほ已まずして曰く『我れ嘗け法皇の命を奉じて一生を九死の中に得天下の大乱を平げ忠義を皇室に盡せり其功大なりと云ふべし然るに今一二寵臣の言を信じて我れを討つべしとの院宣を下し給ふこそ返すがへすも無念なり若し藏人行綱訴へざれば我が一族殆んど危ふかりし今は早や詮方なし法皇を鳥羽に幽閉し奉るべし皆の者用意せよ』と馬に鞍を置かせ鎧を被むり事体騷がしかりき重盛これを聞きて大に驚き急に六波羅に馳せ行き父に見ゑ涙を浮べて諫めて曰く『抑も

我家は桓武天皇の後胤なれども中頃下りて武臣となり官も卑く〻昇殿さへ免されざりしと祖父忠盛に至りて之れを許されぬ大人に至るに及びて源義朝を打ち亡ぼせし功に因り祖先にもなき太政大臣に拜せられ兒の不肖を以て官は內大臣に至り位人臣を極め一門の者皆顯職に任ぜられ日本六十餘州の半を保つに至る實に皇恩の優渥なること譬ふるに物なし然るに今兵を催して法皇に迫り奉らんとせらる〻は何の意ぞや重盛は從ふ事を得ざるなり君に忠を盡さんとすれば親に双向はざるべからず父に孝ならんとすれば不義に陷る重盛の進退此に谷まりたりいよいよ御謀反の上は軍の血祭りに我れの首を打ち而して後出らるべし』と直衣の袖をしぼりつ〻諫めしかば清盛これを

聞き『わが此く計ふも全く我身の爲めならず子孫を思へばなり然るに汝我が爲すことを以て不可となさば良きに計ふべし』と不興の色にて内に入れり

既にして重盛家に皈り思へらく父は心荒き人なれば又如何なる事を起さんも知るべからずとその夜重盛密かに令を出して天下の大事あり速かに來るべしといふ人々相語りていふ沈重の人此令を發するは必らず故あらんと先を爭ひて八條小松に集り六波羅には一人の兵もなし

重盛使者をして清盛に言しめて曰く『法皇大人の事を起さんとせしを聞し召兒に大將軍の院宣を下され大人を征伐すべしと仰せ付けられたり昨日も申しゝ如く父に弓矢を向くることと子の爲すべき次第にあらずされど君命なれば

致し方なし故に若事を起し給ふなれば院宣に從ひ奉らざるを得ず』と清盛大に驚き答て曰く『汝に世を讓りし上は以後決して此の如きことあるべからず汝此旨を奏上して救を乞ふべし』と是に於て重盛涙を流し父にして此の如くならば爭でか刃向ひ奉らんやと父の惡を言はずして己れを責め集りし人々に向ひ『此度は傳聞の誤りにて汝等を召び集めしなり今後若し事あらば今日の如く疾く馳せ來れよと云ひて散じ去らしめたり是れは重盛が權謀を以て父を威しその過ちを救はんとしたるなり法皇これを聞召して『重盛は怨みに酬ゆるに德を以てす眞に忠臣なり』と宣ひて久しく感泣したまひしといふ「父に爭子あれば不義に陷らず」とは是れこれの謂ひなり

○恩賜の御衣（菅原道眞の事）

「臣の貴ぶ所は忠なり」忠とは誠の心を以て君に事へまつるをいふ菅原道眞の如きはよく忠誠を盡せしものといふべし菅原道眞は淸和天皇の御世より陽成宇多の御世を經て醍醐天皇に至るまで總べて五代の天皇に事へまつり忠義いと深かりし人なり宇多天皇御位を醍醐天皇に讓り給ふに及び道眞を右大臣に任じ給ひ左大臣藤原時平とゝもに天下の大政を執らしめ給へり

醍醐天皇御齡少く在しまし卽位の始め天下の大政に御心を留めたまふことなくしば〳〵神泉苑等へ行幸あらせたまひ民の煩ひもありしかば道眞大にこれを憂ひ折もあら

ば諫めたてまつらんと思ひ居たりしに天皇神泉苑に行幸ありて御宴を催させたまひしに一羽の白鷺ありて池の汀に立てり天皇御覽じて『彼の鳥捕りて參れ』と宣ひしかば御供の者走りて其處に至りしに鷺は羽振ひして飛ばんとす御供の者聲をかけ綸言なり飛び去るべからずと言ひしかは非情の鷺も意を解せしものゝ如く首を垂れて動かずすなはち捕へ獻りしかば天皇叡感斜ならず御手づから鷺の羽に鳥王と記し五位の爵をたまひて放ち給へり今日尙ほ一種の鷺の五位鷺といふはこれより出でたるなりといふ道眞斯と見て鳥すら勅命をかしこむこと彼の如し况んや國民をや車駕の過ぐるところ農は耕作を休み商は賣買を休めろの害を被ること少なからず願くは陛下民の憂を思

ひやらせ給へと諫め奉りたり天皇素より賢明にましませしかば道眞の諫めを聞かせ給ひて大にその過を愧ぢたまひ爾後永く宴遊を廢して御心を民の上に注がせたまふに至れり

道眞は博學と忠誠を以て上皇と天皇の御寵任を得殊に政治に熟練し裁決すること水の流るゝが如く天下の人望は自然に道眞に歸せり左大臣藤原時平これを見て心快からず陰に源光藤原菅根等と結び百方道眞を讒言したり天皇年なほ幼きを以て遂にその言に惑ひ道眞の官を貶して太宰權帥とし筑前の國に遷し給ふ道眞憂悶して自からその寃を明かにすること能はず宇多上皇に一首の歌を奉れり

流れ行くわが身藻屑になりぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ

上皇哀に思召し天皇を諫め參らせて道眞の左遷を止め給はんとし其閉居せさせ給ふ朱雀院より大内に入らせ給ひ清涼殿の邊にて人を近づけて叡慮の程を仰せ出させ給ひけれども其人時平に與しければ斯くとも奏せざりしより天皇出御ましまさゞりしかば空しく還らせ給へり道眞遂に都を出でゝ太宰府に到り鬱々として日を送れども君を思ひ奉る心は常に止まず往年九月十日の夜清涼殿にて菊の御宴ありし時

君富春秋臣漸老　恩無涯岸報猶遲。

と云ふ詩を獻せしかば天皇御覽じて叡感の餘御衣を脱ぎて與へ給ひしを筑前まで持ち行き天皇の御形身と身に添

へ居たりしが九月十日去歳の今宵のことを思ひ出でゝ

去年今夜侍二清涼一　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在レ此　捧持毎日拜二餘香一

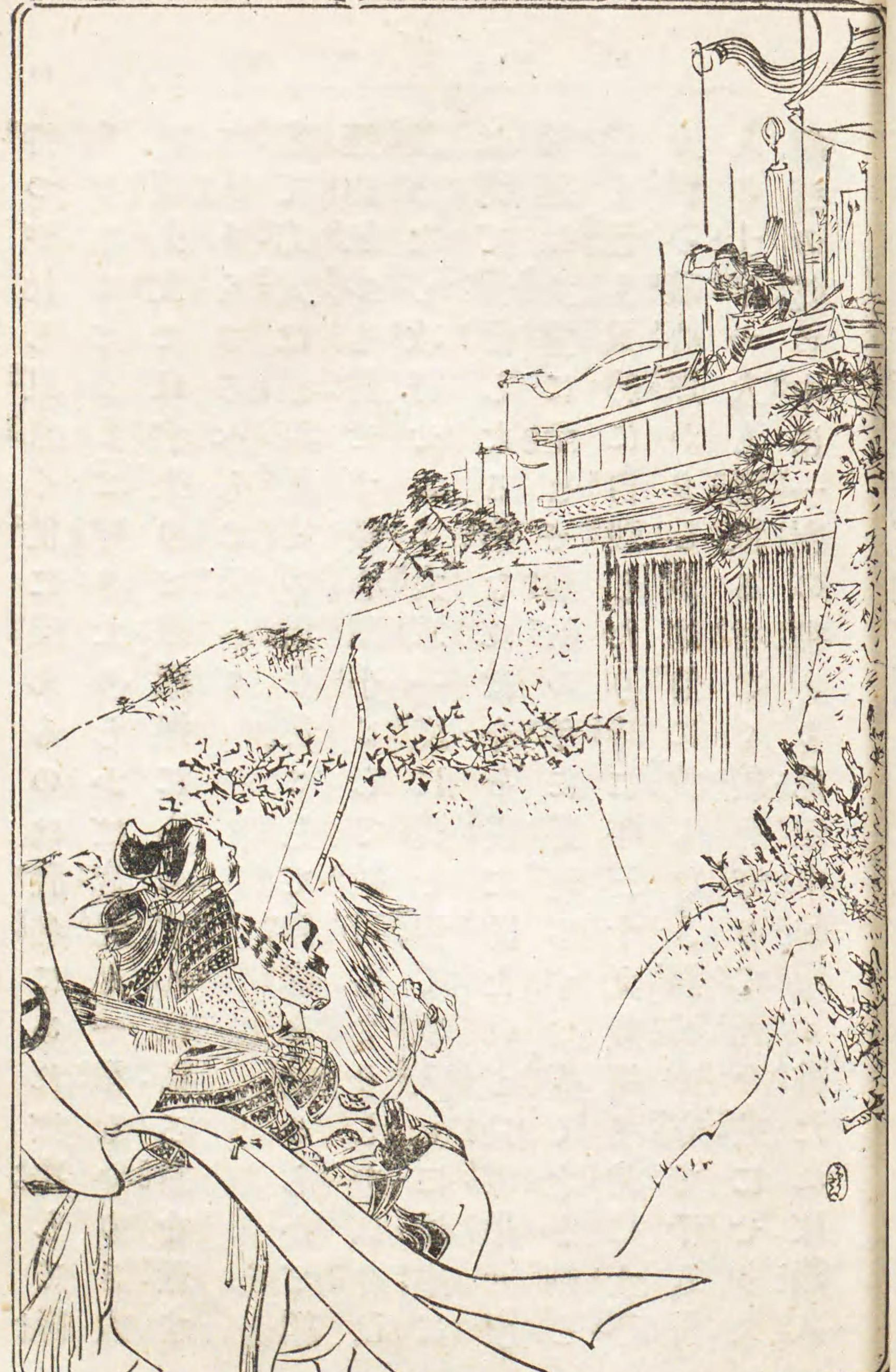
と作りしなど詩歌に寄せて忠義の心を表せり人皆無實の罪に有用の人を失ひたるを歎かざるなし後世敢て名いはず菅丞相といふ天暦中祠を北野に建て謚して天滿天神といふ社を建て像を畫き諸國にこれを祭る

〇岩屋の籠城（高橋紹運の事）

「難至りて節顯はるゝは忠臣なり」と忠臣たるものはいかなる危難に遭ふとも固くその分を守り死に至るも變ぜざるものなり高橋紹運は累代大友家に屬して筑前國岩屋の城

を守れり當時大友家稍々衰へしかば天正十四年七月薩州の國守島津修理太夫義久數万騎の兵を遣はして紹運を岩屋城に攻めたり或人紹運に說きて曰く『岩屋は要害の地にあらず寶滿ヶ嶽に立籠りて防ぎ戰ふべしといふ』紹運否みて曰く『此所を去ればとて勝つべき軍にあらず敵に懼れて迯げたりと世に嘲り笑はれんも口惜し此城を以て墳墓の地となすべし』と義氣愈よ盛んなり

斯くて島津の大軍城を圍みて嚴しく攻めしかど屈する色なく能く防ぎ守りたり義久の士大將新納武藏守忠元矢留を請ひて城中に諭すべき事ありと呼はりて曰く『紹運の武勇世に名高しと雖も惜むらくば大友家に組みせられ今や滅亡旦夕に迫れり古き詞に一張一弛と云ふことあり宜し



く速かに義久公と和すべし』と紹運之を聞き自ら家臣麻生外記と名乘りて應じて曰く『仰せの事紹運に申すべき程の事にあらず聊か義の當れる所を述ぶべし人々能く聞かるべし總て盛衰消長は時の運にて古の細川畠山山名を始めとして今川武田近國にては尼子大内等一たびは盛んなりしと雖も終には滅亡せしにあらずや紹運此期に及びて如何ぞ冑を脱ぎて降を乞はんや大友の家も右大將頼朝卿の時より子孫國を受け傳ふれども日向の軍敗れしより以來斯く衰へたりされど今にも秀吉公大軍を以て九州に渡り薩摩に攻め入らんには鹿兒島の破れん事も又遠きにあらざるべし勢盡き運衰へしを見て志を變ずるは弓矢取る身の耻辱なり松壽千年終には朽つべし人生は朝露の日影を

待つが如し只永く世に殘んものは義名にあれば決して降參することなし』と呼りたりしかば忠元も一言なかりき人々皆外記とは名乘りと雖紹運にあらずんば斯る言を發する人あらざるべしと云へり

斯て忠元は猶莊嚴寺の僧を使として降參を勸めしかど紹運志氣少も屈せず義心確乎として拔可らざりしかば今は詮方なし攻寄せよと大軍一度に鬨を作て攻入しに城中には豫て覺悟したる事なれば今を限に防たれど衆寡敵せず紹運は女童に至まで猶敵の手に懸可らずと盡く之を刺し殺し己も又終に自殺したり時に年三十九歲紹運常に士卒を憐み義心厚かりしかば他に救もなき孤城を守て千八百人の士卒一人も逃散る者なく義を守りて死を共にせり又紹運の鎧の中に一封の書あり島津中務殿と書たれば義久

取て之を讀しに今度降參の勸に隨はざるは是れ義に從ふ故なり別に一封の書を大友家に送り届け給るべしとありたり義久嘆て曰く『類ひ稀なる勇將を殺したり此人を友とせは如何に嬉からん惜き事をしたり』と僧を呼て厚く葬禮を行ひ壇を築き義久自ら香を燒き再拜せしかば武夫等皆燒香し淚を流してうの忠勇を稱せしといふ紹運の如きは所謂『唯だ義のある所は命を捨てヽ忠を効す』者といふべし

○龍泉城の旗風（小川傳右衞門の事）

黑田長政の臣に小川傳右衞門と云人あり征韓の役長政の命を奉て龍泉城を守る時に小西行長は平壤に於て明の大軍の爲に圍れ大に窮て救援を鳳山にありし大友義統に求しに義統其報を聞き到底勝と能はずとなし倉皇逃走て都城に赴く其途中龍泉城下を過ぎ小川傳右衞門を見て之に

語て曰く『平壤の軍明の大兵の爲に圍み攻られ行長必ず戰死せしならん然ば明軍勝に乘して攻め來るを必定なり速に避るに如ず』と傳右衛門笑て曰く『某主人の命を奉て此城を守る敵若し至ば將に死力を渴して決戰し以て我武名を擧んのみ若し力足ずんば唯一死以て我が主命を全するを能ばざりし罪を謝するあるのみ今敵兵の多きを聞き恐れて之れを避くるは武士の最も耻る所なり』と義統愧ぢて去る

既にして平壤の軍ろの敵すべからざるを知り行長引卒して鳳山に至り大友氏に合せんとす達すれば大友氏既に去れり因りて遂に都城に赴きしに途にして龍泉城を望み遙かに我が旗幟の飜るを見て大に喜ぶ明軍行長を追ふて城に近つく之を見て其部下の將に命じ銃手百人を率るて赴

き援れしめ勇を皷して明軍を拒ぎしかば行長城に入ることを得大に其來援を謝せり傳右衛門曰く『明軍幾万あるも決して畏怖するに足らず此城元と地勢險要なるのみならず食糧亦多し防禦の事必ず心を勞するなかれ某能く之を處せん』と行長嘆賞して其剛勇天下無雙と稱す傳右衛門果して雲霞の如き明の大軍を孤城に引き受け遂に之を走らす既にして長政傳右衛門に命じ栗山利安の兵と合して江陰城を守らしめしに傳右衛門亦明の大兵を破り死傷算なかりしといふ傳右衛門の如きは能く主命を全ふし國威を海外に輝かせしものといふべし所謂赳々たる武夫は公侯の干城なり赳々とは武威ある貌にて城を守るに足る勇士といへる義なり

○一擧にして衆善聚る（甲賀孫兵衛の事）

古人曰く「君子の上に事ふるや進んでは忠を盡さんことを思ひ退きては過ちを補はんことを思ひその美を將順しその惡を匡救す」と實に甲賀孫兵衛の謂ひなるべし稻葉正登の臣に甲賀孫兵衛と云ふ者あり正登弟あり式部といふ性粗暴にして毎に過失多し正登之を憤り遂に孫兵衛を召し命を銜めて往きて式部を刺さしむ孫兵衛時に年十六思へらく同胞の親みは天倫なりたとひ過ちあるも宜しく其罪を宥すべしと因りて再三諫めしかば正登悦ばずして曰く『汝怯懦事を遂ぐること能はざるを以て辭を設けて之を避くるなり汝が如き必ず事を全ふすること能はず吾れ當さ

に他人に命ぜんとす』と孫兵衛曰く『君以て怯とせば臣は乃ち命を完ふせん然りと雖も事の濟否は預め期すべきものにあらざれば願くば監者一人を得て與に倶に行かん』と正登その言に從へり

孫兵衛乃ち式部の許に至り先づ監者をして入りて告げめて曰く『甲賀孫兵衛今重命を奉じて來れり而して監者は某なり』と式部其の兄の命を察して曰く『我れ固より此事を覺悟せり』と乃ち刀を按じて孫兵衛をして入らしめ呼んで曰く『汝近かば則ち斬らん』と聲色倶に急なり孫兵衛徐かに佩刀を脱して進み式部の前に跪づけり是に於て式部色稍解けたりしかば孫兵衛手を下げ首を垂れて曰く『公の暴行日に益す熾んなり其罪釋すべからず是を以て主君今日臣に

命じて公を刺さしむるなり公これを諒し給へ』と遽かに起ちて式部を仆し懐より匕首を出して其の胸に擬し顧みて監者に謂て曰く『子請ふ皈りて此狀を主君に復命し以て吾れの怯にあらざることを辨ぜよ』と言畢りて式部を扶け起し溫顏を以て諭して曰く『事此に至る今に及びて如何とも爲し難し唯公出奔せよ孫兵衛從ひて公を保護せん』式部その言に感じて遂に出奔せり後數年にして式部病んで死せしかば正登乃ち孫兵衛を召還して其主人の過ちを遂げしめざりし志を感賞せりといふ孫兵衛のこの處置衆善聚まれりその顏色を犯して諫むる者は義なり君命を受けてその事を誤らざるものは勇なり君の弟を奉じて死を免れしむるものは仁なり要するに皆忠誠より出づ「君に事ふる者事

を擇ばずして之を安んずるは忠の盛んなるなり」とは是の謂ひなり

○耳觸の言葉（杉田壹岐の事）

「忠言は耳にさかへども行に利あり」といふ誠の心を以て諫むる言葉は時として聞く人の耳に惡しく聞ゆることあるものなれども其の言葉の如く身におこなふときは大に益あるものなりされば目上の者といへども過ちあれば遠慮なくこれを忠告し又己れに過ちあればその忠告に從はざるべからず寛永の頃越前の主伊豫守の家老に杉田壹岐と云ふ者あり壹岐元とは足輕なりしが性敏達にして遂に登庸せられ厚祿を受けて國老に列し常に忠誠を以て心とし

屢ば君の過ちを直諫し匡救する所甚だ多し或る時伊豫守國に在りて鷹狩を催ふし晡時に及びて皈城せしが家老等皆出で迎へり伊豫守喜色滿面に顯はれ家老等に對して『今日汝等の働き平時に優れて見えたり斯くては一朝事あるに當りて出陣することあるも大に用ふるに足るべし』と賞したり家老等之れに應じて祝して『是れ御家の爲め最も賀すべきことなり』といふ然るに壹岐一人末坐にあり默々として言はさりしかば伊豫守怪みて壹岐に向ひ『汝は何と思ふや』と問へり壹岐答へて『今主君の御意を承りて誠に嘆かはしく思ふなり現に家臣は主君の鷹野に侍するに當り君意圖られず過ちて其意に悖ることあらば速かに首足所を異にすべしと既に必死を誓ひ妻子に暇を告げて家を出づ

下の上を疎み怖るゝこと此の如し萬一事起るに及ばゝ何とて用に立つべきや然るに主君今日の實を知り給はずして之を賴もしく思し召さるゝは實に愚かなることなり』と伊豫守之を聞きて氣色を損ぜしかば近侍の某壹岐に勸めて去らしめんとせしに壹岐目を怒らして某を睨み『諸子は鷹野に侍し猪猿を逐ひ廻りて以て君に盡せりとす我が思ふ所は是れに異り』とうの儘脇指を抜きて後へ投げ捨て伊豫守の側へ進み寄り『疾々臣が首を刎らるべし他日の衰運を見るに優れり又以て君恩の萬一を報ずるに足れり』と頭を延べて平伏せり伊豫守これを見默して奥に入れり他の家臣等壹岐に向ひ『主君今日鷹野より機嫌麗はしく皈られしを其意に悖りて諫むるは如何あるべきや時機を計られ

ざるは惜むべきことなり』と云ひしかば壹岐乃ち曰く『君を諫むるは時を考ふるの暇なし今日は能き序なり且つ我れ賤しき身分より登庸せられたるものなれば自ら諸老臣と異なり』と諸家老これを聞きて感嘆したり斯て壹岐は家に皈り切腹の用意して君命の下るを待ち妻を呼びて事の始末を語り且つ諭して曰く『汝は婦女の身なれば君恩を受けずと雖も我れ厚恩を荷ひ下賤より擧げられて家老に列せり汝も亦榮なり是れ限りなき君恩にあらずや然れば我れ切腹仰付らるゝの後只朝夕君恩の有難かりし事を忘れずして苟も上を怨む心あるべからず若し女心にて我が身の憂鬱につけて上を怨むるやうの事を言葉の末にも出しなば黃泉の下まで深く怨みと思ふべし』と云ひ諭し而して君

命の下るを待ち居たり「臣の罪は君を毀るより深きはなし」と壹岐は死に至るまでこの格言を愼めり

その夜更けて後ち人來りて門を叩き入りて登城すべしとの命を傳へたり壹岐は果して然りと直ちに登城せしに伊豫守は之を寢所に召して『今日汝が言ひしこと心にかゝりて寢ぬることも能はず故に深夜なれども呼び寄せしなり我れ實に過まてり汝が志感ずるに餘あり』といひて佩刀を賜ひしかば壹岐は事意外に出で覺えず落涙に咽びつゝ拜領して退城せりといふ

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

○父母の恩（池田光政、山田古嗣の事）

父母は我を生み我を養ひ我を教へて人となせしものなればて能く愛敬を以て之れに事へ父母の心を安樂にして平和なるやう孝養を盡さゞるべからず池田光政は新太郎と稱し備前の藩主なりしが母に仕へ從順にして奉養至らざるなし一日母人をして松を庭に植えしめしにその意に稱はざりしかば光政自ら鍬を取りてこれを植ゑ替へたり母又舞ひを好みしかば光政時々自ら舞ひてその母を慰めしといふ

父母の恩は限りなきものなり山は高きものなれども又母の恩にくらぶれば猶低し海は深きものなれども父母の恩にくらぶれば猶淺しされぱその恩を思ひて孝行を盡すべきは勿論なるに兎角父母この世にいます間は左までその

恩を思はず動もすればその言葉に逆らひその心に違ひ父母已にこの世を去りたまひたる後に至り始めて以前の非をさとりて後悔するもの多きは嘆かはしき至りならずやされば子たるものは常に能く此理をわきまへ父母の存生中に一日も孝を行はずして空しく過すことなきやう心がくべし古の諺に「孝子は日を惜む」と云へるは全くこの意なり

山田古嗣は幼にして母を失ひしが一日韓詩外傳を讀み樹靜かならんと欲せば風止まず子養はんと欲すれば親待たずといふ語に至り涕を流して書の濡るゝ覺えざりしといふ是れは孝子が父母の終りたる後に至りて孝行せんと欲しても父母已にいまさゞることを深く嘆きて云ひたる言

葉にて意は樹は靜ならんと欲してもあやにく風常にふきて止ざれば靜まること出來ず其れと同じく子は頻りに親に孝行せんと思へども親は歳月の流れに隨ひ早くも世を去りて我をまちたまはずと云ふことなりされば親のいませる日に孝行を勵みて後悔なきやうにせざるべからず勅語に「父母に孝に」とあるは此意なり

○孝行の摸範（松平好房の事）

「たゞ一たび失ひて再び得べからざるものは父母なり」父母は我が身の生れし本にして世にまた父母のあることなし故に一たび父母を失はゞまた求むべからず故に父母の此世に在るの間は我が力の及ぶ限り孝行を盡すべし後に悔ふとも及ぶことなきなり

朝散太夫殿中監松平忠房の嫡子に好房と云者あり幼にして穎悟四五歳にして文字を解す常に父母の在す方に向て足を伸ず出る時は必ず行く先を父母に告て許しを請ひ皈れば又前に來て挨拶し若し珍品を得れば之を父母に献ず父母之を取り見れば大に悦り又父母より物を賜ふとあれば拜して之を受け常に愛して損せざるやう心を用ひ居れり時として書物を賜る時は戴て之を披き讀をはれば又戴て之を納む凡そ父母の言ふ所は敬して違ことなし或は人と談して偶ま父母の事に及べば臥と雖も必ず起き正しく坐して之を聞き或は母の側に侍し若し寸刄錐針の類を見ば誤り觸て身体を傷んとを慮り手づから之を收む是れ古人が「身体髮膚之を父母に受く毀傷せざるは孝の始なり」と云る

に本づきしなり身体髪膚之を父母に受くとは即ち我々の体は骨も肉も手も足も一として父母の賜にあらざるなければ我手足を見るに付ても父母の事を思ひ出で鏡にて我が顔を見るにつけても同じく父母の恩を思ひ出で親の体に傷つけじ親の心に耻をかゝせじと常に我身を慎み孝行を勵むとの謂ひなり

好房稍長じて後は朝夕父母の安否を問ひ若し疾に罹る有ば其側を離れず藥は必ず先嘗め食は必ず先試て之を進む其心を用ると至らざる所なし漸く長ずるに及て奢侈を厭ひ儉約を守り其志を恣にせず言ふ所行ふ所皆父母の心に順ずと云事なし然に性多病なりしかば常に父母の憂をなさんとを恐れ治養甚だ慎めり其孝心の大なる概ね此の如く又能く親族と睦しくして交に禮あり家僕を撫て恩を施り故に

て臥せしが父母來り視れば必ず起坐して待ち恭敬を失ふことなし苦痛切なりと雖も少しく快しと稱して父母の心を安からしむ然れども病漸く革まりて遂に逝けり其終に臨み侍者に告げて曰く『小子命今日に限れり葬のこと一に大人の心に任すべし』と云へり父母慟哭すること限りなく柩を三河の鄕里に送りて祖先の墓畔に葬る好房幼より死に至るまで孝順少しも衰へず孝子の摸範と謂ふべし

○孝子の一心（龜松の事）

「人の行ひ孝より大なるは莫し」若し孝行にかくる所あれば其他に如何なる善きことありとも賞するに足らざるなり故に人は常々孝行の道を怠るべからず父母に病氣又は危

きことあらば我が身を顧ることなく善く力を盡すべし

信濃の國と上野の國との境なる破風山山麓に龜松と云ふ者あり父を惣右衛門と云ふ居宅より三町許り隔て丶字逢月と云ふ處に猪鹿の害を防がん爲め毎年秋期番小屋を設くることとなせり或る日の夕方父惣右衛門は龜松を伴ひて其小屋に至り龜松は出で丶草を刈り惣右衛門は小屋の中にて火を焚き居たるに後の方より一匹の狼來り來りて惣右衛門の足へ喰ひ付きたり惣右衛門狼狽して爲す所を知らず如何はせんと振り返りしに又脣より腮へかけて食ひ付きたれば惣右衛門叶はじと思ひ兩手にて力のかぎり狼の兩耳を握み聲を揚げて救を呼べり龜松之を聞き大に驚きて馳け來り直ちに持ちたる鎌を狼の口へ打ち込みた

り然るに狼之を嚙み折りしかば龜松は父の鎌を取り上げて其柄の方より狼の口へ捻ぢ込みて之を後に引き倒せり此の時父惣右衛門も起き上りて父子共に力を極めて押へたれども父は數ヶ所の痛手に氣力盡きて其の塲に打ち倒れたり狼は猶ほひるまずして起き上り龜松に飛び掛らんする所を龜松すかさず傍に在る石を取りて狼の口に差し込み鎌の柄をも打ち込みて其の牙を缺き叉大指にて其兩眼を抉り拔きて遂に之を斃したり惣右衛門は所々に傷を被りたれども急所にあらざりしかば不幸の中の幸を得龜松に介抱せられて家に皈り翌日より療治藥用に手を盡せしかば日を追ふて快氣せしといふ時に龜松年僅かに十一歳なり未だ幼弱の一童子にして己の身命を顧みず能く親

の危急を救ひしこと忽ち遠近に聞えて其孝勇を稱せざるもの無かりき

○孝は百行の本（鍛冶孫次郎の事）

人の子たる者の第一の務めは孝行なり我々父母より受くる恩は實に海よりも深く山よりも高きものにて一生涯如何に心をつくし骨を碎き務むることも父母の恩を報ひ果すと云ふ時は決して來らざるものなり「子を持て知る親の恩」と云ふ諺もあり親の恩は我々が自から子を持て親となる時に至て益々其の忝きことを知り得るものなり父母の恩は斯くまで貴きものなれば幼少の時より決して之をおろうかに思ふべからず

孫次郎は肥後國山鹿郡湯町の人なり累世鍛冶を業とす孫次郎に至り其業拙くして行はれず究すること甚しく年五十に及ぶも妻を迎ふることは能はず父死して後獨り母と共に居り孝心極めて切にして朝夕の供養頗る厚かりき母性酒を嗜みしかば孫次郎勤勞僅かに餘裕あれは必らず買ひて之れを進めたり酒家その孝情を感じて酒を與へて其價を取らざるに至れり孫次郎反て悦はずして『此の如くならば足下我母に飲ましむるなり願くば我れ子たるの道を盡し我が母に飲ましめん』といひ去りて他の酒家に至りて求む此の如きこと屢ばなりしが後酒家皆孫次郎の意を悟りて來り買ふことある毎にその價を省きて之を賣るに至れり

又郷人集り食することあれば孫次郎は必ず肉類を食せずして之を携へ皈り以て母に進めんとす衆皆之を知り孫次郎に進めて食せしめ更に美味を其母に贈るを常とせり里中に温泉ありしが母之に浴することを好みしかは孫次郎母を負ふて常に此に赴きその意に戻ることなし母又屢ば佛祠に參詣せんとす然れども年八十餘の老体なれば歩行自由ならずして獨り行くことを得ざるを以て孫次郎常に之れを負ひて佛祠に至る雨降る時と雖も未だ嘗て一日も廢することなかりき

母一日孫次郎に向ひ『汝年既に五十亦壯なりと云ふべからず我が身のあるを以て斯くまで苦勞するは我れの忍びざる所なり』と云ひしかば孫次郎慰めて「我れ資性壯健にして

膂力人に絶す且つ久しく坐するは我れの好まざる所にして歩行すること甚だ快よし況んや母と共に佛祠或は温泉に行く何の樂みか之れに如かん我れ貴人の外に出づるを見るに必ず輿馬あり我が家貧なるが爲めに母の出づるにも輿馬なしされども幸一男ありその強きこと馬に過ぎたり今母之に乘り給ふを以て輿馬あらざることも憂ふるに足らず』といひ既に負ひ出るに及びて母を顧み戲れて曰く『馬の疾く馳くること遲きことは母の意の如くすべし』と或は趨り或は止りて馬の狀をなし母の心を慰めんことを勉めたり母之を見て乃ち大に笑ふ里人の之を見るもの皆先づ笑ひて後ち感嘆して淚を流さゞるものなし

母既に温泉に浴すれば己が身を以て母の衣を温め其出づ

るを待つが如き孝心の厚きこと一として至らざるはなし夏に至れば母の身を扇ぎて其煩熱を散し冬夜は母の熟寢を待ちて已れが衣服を母の身に加へ潛かに出でゝ温泉場に赴き之に投じて寒を禦ぎ黎明にして家に皈り母をして知らしめず母病むときはその側を離れず衣帶を解かず欲する所の飮食を問ひ力を極めて之を調へ又常に衣衾を洗ひ臭穢なからしむ其後母疾みて沒せしかば之を野に葬り號泣して去らず其後日に往きて哭せしが里人之を哀み悲まさる者なし

寛文の初年國主細川公具に此の事を聞き歎賞措かず孫次郎をして其舊業を棄て俸を城下に受けしむ國中これを悅ばざるものなし嗚呼人として年五十に達せば性質強健な

るものと雖も猶ほ且壯年の如くならざるものなり然るに孫次郎日々母を負ひて往返し供養日夜怠ることなく母をして身を終るまで其困苦の色を見ることなからしむ是れ最も人の能し難き所なり蓋し孫次郎唯母を思ふの一念より此の如きを得たるものなり先哲曰く「能く事へて親を安からしむるは子たるものゝ職分なり」と孫次郎の如きはこの言に背かざるものと謂ふべし

○孝悌の寶（備中甚介の事）

「孝悌の子は家の寶なり」といへる語は甚介の行ひを見てこれを知るべし備中國淺口郡柴木村に甚介と云へる農夫あり母に事へて至孝なり甚介兄ありと雖も母は兄と共に居

ることを好まずして常に甚介の家に在りしかば甚介孝養至らざる所なく朝夕能く母に事へたり母先づ箸を下さゞれば己も亦食に就くことなし母食し終れば欣然として始めて箸を下せり又母の寢に就かんとするときは自ら褥を展べ冬は温かならしめ夏は涼しからしむ母寢ねて未だ熟睡せざれば己れも亦眠ることなし母茶を好みしかば毎朝早く起き茶を烹席を布きて母の起るを待てり室內には總て皆藁蓆を布きしが母の坐すべき所のみは藺蓆を布けり市に往くことあれば必ず魚菓甘旨の物を買ひて皈り之れを母に進めて此上なき樂となせり母年八十に至りしとき顏容猶ほ六十の時の如し人其故を問へば母答へて『甚介我れを養ひて意の如くならざるはなし彼の公侯の母夫人と

雖も亦恐らくば吾が樂みに如かざるべし此れ我れの衰弱せざる所以なりといへり』

始め父死する時田畑を甚介兄弟に分與せしが後ち兄は將にその産を破らんとし甚介に謂て曰く『我が田は瘠せて穀物實らず汝が田は甚だ肥ゑたり故に今此の如し請ふ試みに之を取り易へん』と甚介謹みてその謂ふ所の如くせしが其收獲の時に至りては甚介の獲る所遙かに兄に優れり是れ必竟地の肥瘠にあらずして勤勞の如何に依るなり兄それを見て大に耻ぢたりといふ

既にして兄租を納むることを缺き吏の爲めに囚へらゝに至り穀を他人に借りて自ら救はんと欲せしも人皆兄の遊惰なるを知りて之れを貸す者なし甚介之を憂ひて先づ悉

く己れの蓄ふ所の者を出して之を贖へり是によりて兄頓かに刑を免がるゝことを得たり

承應年間領主甚介の孝悌を聞き召し出して賞して曰く『汝の孝悌は古來稀れなる所にして父兄に事ふる者の鑑となすべし』と田を賜ひて永くその租を免ぜしかば甚介拜謝して出しに諸士之を止めて『汝は何によりて此く孝悌なるか』と問ひしに甚介曰く『我れ孝悌を知らず唯母食を甘せざれば我れも亦食ふを欲せず母寢に安せざれは我れも亦眠ることも能はざるのみ兄に於ても亦此の如し』と諸士又問ふ『汝の兄にして不善なること此の如きは何ぞや』と甚介答へて『家兄は性不善なるにあらず彼れ多病にして事を勉むることも能はず故に人以て遊惰となすなり』といへり或人柴木村

の人に謂て曰く『甚介は田を賜はる汝等これを羨まざるか』と人々答へて曰く『甚介が孝悌常人の企て及ぶ所にあらずたとひ一郷の田を擧げて悉く之れを彼に賜ふことあるも我等何ぞ敢て彼れを羨やまんや』と衆口一の如しその一郷の龜鑑となり人に尊重せらるゝこと此の如し

○孝の一字よく大義を知る（黒田長政の事）

「孝は萬善の長」といひ萬善の中に孝ほど善なるものはなし君に仕へては忠となり兄弟に對しては友となり朋友に交りては信となるその他何事につきても人にすぐれたる行ひあるべし昔賤ケ岳の戰に豊臣方の將中川清秀佐久間玄蕃の爲めに討ち敗られて戰死せしかば豊臣方の軍中大に

騷動し諸陣守りを棄てゝ走らんとせしを神子田半左衛門大聲にて呼はりて曰く『明日秀吉公大軍を從へ來りて此急を救はんすと人々堅く守りて少しも氣遣ふ事なかれ』と觸れ廻りしかば衆皆此一言に勵まされて頓かに英氣を増せり是れ半左衛門が一時の計策なれども明る日果して秀吉馳せ來れり

始め秀吉清秀が討死の注進を聞きて『玄蕃は引取りたるか』と問ひしに使者曰く『彼れ未だ本の陣にあり』と秀吉聞きもあへず腰刀を拔きて額に當て我れ此合戰には勝ちたりと五六度跳り上り馬を引き寄せて之に飛び乘り只一騎にて驅け出し道ち〳〵揚言して曰く『我は秀吉なり必勝の謀ありて今速かに馳せて賤ケ岳に向ふなり追々來らん軍卒共

に食物を與へよ是れ我れに志を餽するの驗なり』と呼はりて打ち過ぎければ跡より一騎がけに追ひ付くもの終夜引もきらず沿道の村民皆先きを爭ひて食物を持ち出で軍卒に餉へり

此時豐臣方の將黒田官兵衞孝高一砦を守りしが敵強く攻め來りて味方の助けなくんば戰死すべしと決心し家臣栗山四郎兵衞利安を呼びて『汝は我が子吉兵衞を具して此急難を遁れて我が後嗣を絕たしむべからず吉兵衞は僅かに十歳なれば虎口を避けたりとて家の疵となるの理なからん世人は却りて我が深慮を賞すべし』と云ひしに四郎兵衞これを辭し他人に命ぜんことを請ひければ孝高曰く『今吉兵衞を無事に退けしめたらんには爰て留りて討死せんよ

り我れに對して百倍の忠節なり時移るぞ』と急かせしかば四郎兵衞止むことを得ず許諾して吉兵衞を先きに立て行くこと一里ばかりにして吉兵衞怪みて『我れを何方に具するぞ』と問ふ四郎兵衞事の由を告げしかば吉兵衞聞きて『君父を置きて何處にか行かん武士は逃ることのなきものぞと父君の常に敎へ給ひしものを何とて我のみ遁れんや』と乘りたる馬を蹴立て引返せしかば四郎兵衞その勇に感じ誠に父君の御子かなと涙を流し從ひて砦に皈り竟に此戰に勝ちしといふ吉兵衞後に黒田甲斐守長政と稱す長政が大義を辨へしは全く孝に本づけり古人曰く「孝は德の本なり敎の繇て生ずる所なり」と人の行ひの中によろづの德あれども其本となるものは孝行なり故に孝行は凡ての

教の生るゝ所とす されば先づ人は徳の本を修めずしてその末に走るは宜しからず

○學徳孝道兩ら全し（淺見絅齋の事）

人に學問ありとも親に不孝なるは行の本を忘れたるものなれば何事も取るに足らず須らく淺見絅齋を摸範とすべし淺見絅齋は京都の儒者にして近江の國高島の生れなり初め醫を業とせしが中頃山崎闇齋に見えて大にその學徳に心服し遂に業を改めて儒者となり篤くその道に志したり

或時喀血といふ病を患ひ數日を經れども癒えず醫士某診察して『此の如き病勢なれば姑く學を廢して保養すべし』と

いふ闇齋聞いて『死生は命なりいかんぞ少年をして偸惰の風に習はせん』と絶えず苦學せしめたり此等の故なるか後には學者にて名を世に知らるゝに至れり

初め絅齋の父絅齋が學問を好むを見て別に一家を持たせんと思ひ其の家を叔子に繼がせしがその者性質宜しからずして家道次第に衰へ親を養ふこと能はざるにより萬事絅齋に依賴せりされば絅齋は毎夜親の家に往きて兩親を看護し事大小となく差圖し夜明くれば已が家に皈りて門人に教授せり此の如くすること夏の暑きにも冬の寒きにも雨の降るにも風の吹くにも怠ることなかりしかば往來の人々皆絅齋の顏を見覺えて其孝行を賞めぬ者はなかりしといふ古歌に

才德も學問もある人よりも
親に孝ある人ぞたふとき

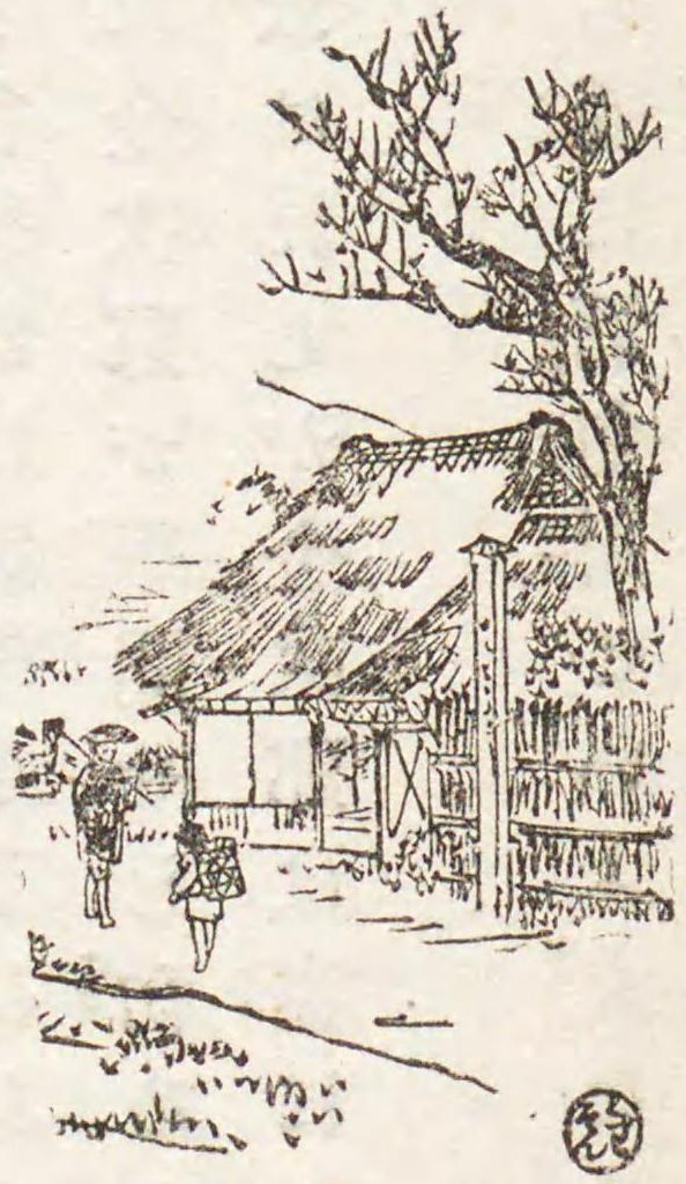
とあれども綱齋の如きは此の二つを全ふしたるものと謂ふべし

○立身出世は孝を本とす（渡邊華山の事）

身を立てゝ世に出るには夫々の道あるものなれども父母に孝なる心がその本となるものなり故にいかなる事をなすにも孝行を忘るべからず渡邊華山は三河の國田原の藩士なり幼少の時より甚だ伶悧にして父母に事へて孝心深かりし或る日同藩で士高林某と云ふ者華山の家に來りて談じて曰く『子が常に學者とならんことを心掛けらるゝは誠

に善しされども方今學者となるには海外諸國の學に通じ亦和漢の學力あらざれば名を揚ぐること能はず之れを學ぶには多くの年月を費し巨額の資金を要すべし今子が家貧なり學者とならんよりは寧ろ畫工となるべし畫は速かに成りて金も得易し』と懇ろに忠告したり華山性至孝にして母に事ふること甚だ謹む今友人の言を聞き大に感じ思ふやう學者となりて天下に爲すことあらんとすれども父母の飢寒に迫るを如何せんと當時有名の畫工金子金陵谷文晁等の諸家に從ひて畫法を學びたりされども家固より貧しくして良紙を購ふこと能はざれば毎日朝より晝に至るまでは市街を徘徊して紙屑を買ひ集め問屋に持ち往きてこれを賣り拂ひ僅かなる口錢を得て父母並びに妻弟を

養ひ晝より深夜に至るまで畫を習ひ辛くも美濃紙を買ひ之れに畫をかきて賣りしが其の技次第に進み後には師と肩を比ぶるに至りたり華山常に曰く『畫を賣るは止むこと得ざるなり一日畫を作らざれば一日の究を盡す一身の究は忍ぶべし父母の困究を如何にせん』と華山大志ありてその畫は餘事なりと雖もその畫名も亦高く世人その畫を貴重せり「身を立て道を行ひ名を後世に揚げて父母をあらはすは孝の終なり」と華山の謂ひなるべし



◯報德の教（二宮尊德の事）

人その學問をするは何の爲めぞ只文字を知り自分の用事をかなへ己れ獨りの樂みとなすばかりにては諺にいふ論語よみの論語しらずにて學問の仕甲斐なきことなれば必らず學問の力によりて智を開き身を修め進んで世間の爲めになる仕事をなすの心がけなかるべからず勅語に「智能を啓發し德器を成就し進んで公益を廣め」とあるも全くこ

の意なり

二宮尊徳は通稱を金次郎といふ相摸國柏山村の人なり十四歳のとき父に別れ弟二人とゝもに母の手一つに養育せられしが家の貧しきが爲め母は末の弟を他に預けんとするを金次郎は押し止め吾れ兎も角もして養はんとて晝は山に往き薪を採りてこれを賣り夜は繩を索ひ草鞋を作り僅かの錢を得て母の心を安んじ弟を養ふことのみ苦勞せりその薪を採る往復には大學を手にして歩みながら之れを讀みたり是れ金次郎が學問せし初めなり先聖が「孝悌は仁の本なり」と云はれしが金次郎は實によくこれを躬に行へり

金次郎が住める邊に酒匂川といふ大なる流あり水の出づる毎に堤を破り動もすれば田面を浸し民屋を毀つを以て處のものは年々家毎に一人づゝ出でゝ堤普請をなせり金次郎は十二歳のときより此の役に出でしが小兒のことなれば力も足らざるべしとて家に皈れば草鞋を作り翌日その場に持ち行きて『われは少年にて一人前の役をなすこと能はず日々力を借る故に聊かその恩に報ずるなりとて己を助けくるゝ人に渡せしかば人々その志を感じてこれを愛したり

十六歳にして母に離れ近親萬兵衛の許に養はれしが萬兵衛は性質極めて吝嗇にて慈愛の心薄かりしかば金次郎の艱苦云ふべからず晝は終日萬兵衛の家業を勸め夜は深更まで寢ねずして夜學したり然るに萬兵衛大に怒りて「汝を

養ふに多分の雜費を要す汝が幼若の働にては之を補ふに足らずこれを思はずして夜學の爲に油を費すは何事ぞ家にもなく田畑もなく人の助けを得て命をつなぐ身にありながら學問して何の用に立つぞ速かに止めよ』と罵りしかば金次郎泣いて『吾れ過れり』とて之れを謝せり

金次郎つら〳〵思へらく文學算筆を心掛けずば一生文盲の人となり父祖傳來の家を興すこと難かるべしされども萬兵衛の言葉も背き難し自力を以て學ばゞ其の怒りにも觸れず我が志も達すべしと荒地を起して油菜を蒔き附けたるに其の實七八升を得たればこれを市に賣りて燈油を求め再び夜學を始めたり萬兵衛又罵りて汝自力にて油を求めて夜學すれば我が雜費には關せざれども汝學びて何

の用に立つか無益の事をせんより夜は繩をなひて我が家業を補ふべしと命ず金次郎其の言の如く繩をなひ莚を織り夜更け人寢ぬるに及びて窃かに燈火を點じ衣にて覆ひ隱し他に光の漏れざるやうにして勉學したり同國酒匂川の堤普請の役に出でし時力を盡して勞働し得たる賃銀を庄屋に託し其の數壹貫文に充つれば村内の寡婦老人其の他貧困の者に二百文三百文づゝ分ち與へ此を以て艱苦中の樂とせり金次郎は實に智德を養ひ人々の爲めを計らんと勉めたり

或年出水の爲に用水の堀筋變りて古堀不用の地と爲れるものあり金次郎休日每にこれを開墾し人の棄たる稻苗を拾ひ集めて植ゑ付けしに幸にして壹苞餘の米を得たりよ

りて之を種として漸く勤勞せしかば年を經るに及びて許多の數に滿てり是に於て己が家を再興せんとて多年養育の恩を謝し萬兵衛に暇を請ひて皈り見れば無住の家の習とて壁破れ戸傾き蔓草軒を蔽ひ蛛網四邊に張り見る影もなく荒れ果て居たり金次郎自ら修覆を加へ塵芥を除き獨居して晝夜業を勵み能く萬苦を盡して遂に家を再興したり

その後金次郎は次第に人に信用せられ常に自ら萬般の事に當り彼に得たる手段は此に用ひ此に得たる方法は彼に施しなどして益す智識を得下野下總常陸陸奥等の國に於て土地を開き産業を勸め飢饉を救ひ負債を償ふ等の方法を教ふるなど世上の利益を爲せしこと少なからず

金次郎また農事の喩を引きて人を教へ導き善を種うれば善を産み悪を種うれば悪を産み種うること小なれば産することも亦小なり種うること大なれば産むことも亦大なりとあまねく小民を説きさとしその教を報德の教と名けたり

文政年間小田原藩主尊德の賢を聞きこれを招きて下野國芳賀郡の民政を委せたり一日茄子を喰ひたるに味常ならず金次郎暫らく考へしが稍ありて箸を措き嘆息し今は夏の初めにして茄子の味よき頃なるに其味八月九月の物に似たり是れ只事にあらずつら〳〵思ふに陽發の氣乏しくして陰氣盛んなるの致す所ならん此の如くにて五穀の登らんこと思ひも寄らず疾く凶荒の備へをなさず此儘に放

置せば飢渇に陷らんこと必定なりと物井横田東沼の民を集め『今年は天氣不順をれば五穀登ることなかるべし斯く見定むる上は速かに凶荒の備へを爲さん一家にて畠一反の年貢を免ずべければ稗を蒔きて飢を避るの資とせよ決して忽にすべからずと嚴命したり人々皆これを聞きて竊かに笑ひ『二宮氏如何に明智なればとて年の豐凶を豫て知ることを得べき殊に一家に一反の稗を作らば三ヶ村の登り高は定めて夥しかるべきされば收穫の際置く所もあらず無用のことなり又昔より如何なる貧苦の者なりとて稗を食ひたる者なきに能く登りたりとて之を食ふものあらざるべしさればとて之を人に與へんとするも人これを受ざるべしと言ひはやせり然れども其貢を免じて作れとの

命は背くべからず人々止むを得ず稗を蒔きしが既に夏の中央に至れども雨は少しも止まず降りしきり冷氣さへ加はりて單衣にては過し難き程なりき怪しき氣候と見る間に早や秋になりしに果して凶年となりしかば關東奥羽の飢民多きこと目も當てられぬ有様なりき然るに彼の三村の者は作りたる稗を以て米の足らざるを補ひ一人も飢えに及ぶものなかりしかば彼の初めに嘲笑ひたるものも金次郎の明智に服して賞せざるものはなかりき

翌年に至り金次郎又命を下し天運の定まる所あれば凶年の來ること早きは三四十年遲きは五六十年に一度づゝあるものなり天明の凶年より以來を考ふれば去年の凶作は未だその數に入るべからず思ふに近き内に大なる凶年あ

るべしまた之れを救ふの手當を爲さゞるべからず此年より三年の間去年の如く貢を免ずべければ何れも心を用ひて稗を作るべし若し怠りたる者あらば村里能く注意して我れに告げよと戒めたり三村のもの共これを聞き去年の明智に感じたれば謹んでその命に從ひ肥を運び力の限り作りしかば幾んど千石の稗を得たり

既にして天保七年に至り五月より八月まで冷氣殊に甚しく盛夏の時に北風吹き寒きこと十月頃の如く人々皆衣を重ぬる程なりしが遂に大凶年となりて天明の凶年より幾層倍も甚しく關八州奥羽の民多くは餓死したり是に於て金次郎村々を家毎に廻り檢め貧しき者を三段に分ち老幼を撰まず男女を分たず一人にて雜穀を交へたるを各五苞

と定めその數に足らざる者はこれを補ひて宛行ふ假令ば五人暮しの家には二十五苞十人の家には五十苞の割合なりしかは貧しき者は豐年すら得がたきを金次郎の惠みによりてかゝる凶年を不足なく暮したり

金次郎また村民を集めて今年の飢饉は全國何れの土地も皆免れざりしに三村の者は平年に異りたることなく安く暮すこと彼の餓死する者に比べなば其幸ひ如何ぞや己れ飢ゑざればとて安坐してあらんは大なる心得違ひなりされば汝等世の飢ゑる人々の心を察し朝は疾く起きて夜明る迄は繩綯ひ日の中は田圃を稼ぎ夜は草鞋を作り莚を織りて一時たりとも油斷なく勉むべし若し明年充分の豐作を見ば何れの家も永く續くの根本となりて今度の凶年は

反て幸を得るの端とならん果してこの見込の如くならば三村の幸福のみならざるべしと懇ろに諭したり三村の者共初めには稗を作りてその効を見今又三年の間稗を作りて多くの食物を貯へ他國の飢ゆるにも關らず飽まで食ひ父子兄弟團居して安らかなるは皆二宮先生の賜ものなりと感じ合ひ諭されし如く稼ぎたりしかば家々今は貧しきものなく三村は凶年の爲めに反て富を得たり是に於て金次郎の名ます〱著はれ四方より來りて敎を受くる者常に門に充ちしといふ

○蛤の土産　(野中兼山の事)

野中兼山も亦若き時より學問に苦しみその得たる智識を

以て種々世の利益を圖りたるは誠に學問をなすの本意にかなへり

兼山は土佐の人なり其執政中津兄の岬の巉巖を破碎して舟の出入に便利を與へたるを始めとし道路河川山林の手入りの他勸業の事など公益を謀りし事極めて多し又年々人を長崎に遣り海外の珍書を購ひこれを飜刻して後學に利せり

ある時將に江戸より皈らんとして書を故鄕の友人に寄せ土佐の國は何とて無き物はなし唯此の地の蛤ばかり風味殊によければ船一艘持ち皈るべし若し安全に着せば必ず進じ申さんとあり人々は皆日を數へて待ち居たりしに着船の日悉くこれを城下の海中に投げ入れしめたり人々驚

き怪しみてその故を問ふ兼山笑ひて『此の蛤は只君等に饋る爲めならず君等の子孫をして之に飽かしめん爲なりと答へしが是れより後果して其の海中に蛤多く生じ遂に一の名産となるに至れりといふ

○才智の効用（熊澤蕃山の事）

「君のため民のためぞとおもはずば雪も螢もなにかあつめむ」といへる古歌の如く熊澤蕃山は經濟の學に心を寄せ中江藤樹に就て學び貧苦の中にありて少も怠らず勉勵せしかば年二十七にして學業大に進みたり（蕃山が修學のことは學と業の卷に載せたり參觀すべし）

蕃山の舊主備前侯蕃山が才智の非凡なるを知りこれを拔

擢して藩政に與からしめたり蕃山乃ち藩政の上に改革を加へ士民の利益を謀れること一々枚擧に遑あらず慶安三年侯に從ひて江戸に赴き騎隊士の職を以て宰臣の事を攝行せり此の時に當り蕃山の名天下に高くその道德學藝に信服する者甚だ多し紀伊侯幕府の宗室としてその威勢將軍に次ぐ然れども蕃山を敬禮しその出入には必ずこれを送迎して門に至れりその他名門大族の蕃山を招聘するもの甚だ多く德川三代將軍家光も亦蕃山の名を聞き一度召見せんとし偶まその意を果さずして薨ぜり

明暦元年備前の民大に飢えて死する者九萬人に及ぶ侯これを憂ひ諸老臣と共にその救濟を謀りしが異論起りて容易に一決し難く見えたるを蕃山言を勵まして曰く議の決

せざる爲めに日を經は餓死の人恐くは增さんと因りて俄かに藩の府庫を開き米を出して之を施さしむ蕃山下吏の怠慢あらんことを慮り自ら領內を廻りその救濟の法を指揮したりしかは民の死を免れたるもの極めて多かりき

又岡山城東西の村落每年夏に至りて水旱の憂ありしに蕃山思へらく是れ近き山の樹木に乏しき爲め大氣を含み雲雨を起すに緣なきを以てなりと命じて松數株を諸山に植えしむこれより後ち雨多くして村民の旱魃に困しむ者なきに至れり蕃山令を下して曰く河に臨める山々の樹木を伐ること勿れ山に樹木なければ雨水を保たず砂土を流して河淺くなるや必せりと蕃山又領內を巡視して池を穿ち溝を通じ灌漑の便漕運の利を計るに概ね馬上にありて之

れを望み指點の間に決するの計りしところ皆民と利益とならざるはなく今日に至るまで皆その惠みを蒙れり後年に至り蕃山同僚の者より嫉まれ仕へを辭せんとの志あり然れども侯の寵眷厚きを以て俄かに之を請ふことを得ず且つその主恩に報ずる爲め力を公事に盡し至らざるところなし人の學問をつとめ智德を養ふは斯くの如く世の文明を進め人々の幸福を增進せんがためなり

明暦二年侯に從ひて木谷に獵し過ちて手足を傷けしかば遂に致仕を請ひ許されて領內和氣郡寺口に閑居す萬治元年蕃山疾を以て備前を辭し京都に來り寓す時に公卿貴紳蕃山の名を慕ひ禮を厚くして敎へを乞ひ車馬その門に滿てり然るに或人蕃山の盛名あるを忌み之を京都所司代牧

野侯に讒言したり侯これを信じて蕃山を厭ふ寛文七年蕃山京都を去りて大和國吉野に行き亦去て山城の鹿背山に至り小庵を結びて住む人あり蕃山に問ひて曰く『先生間ありや』と蕃山これに答へて曰く『吾れ善を爲し德を養はんとするに忙しく夜を日に次ぎて猶ほ足らざるを覺ゆ』と其人又問ひて曰く『先生はいかにして善を爲し德を養ひたまふ』と蕃山色を正して曰く人志を立てゝ善を爲さんと欲すれば喫茶喫飯起臥動作に至るまで皆是れ善に進むの地なり然らざれば人如何なる大事を爲すとも悉く兒女の戲れに過ぎざるなり』と寛文九年蕃山播磨國明石に赴く明石の大守松平日向守これを太山寺の傍らに居らしむ遠近その名を聞き來りて敎を受くる者日に多し蕃山備前を去りてよ

り屢ば窮厄に遭ふと雖も裕々として憂ひとせず

人は咎むとも咎めじ、人は怒るとも怒らじ

怒りと慾とを棄てゝころ、常に心は樂しめ

と云ひて門人と道を講じて娛しめり貞享四年十月書を幕府に上つり政務の改良を勸めしに將軍綱吉の怒りに觸れ古河藩に禁錮せらる蕃山嘆息して曰く嗚呼また吾が道の用ゐらるゝ世にあらずと是れより專ら著書に從事したり

蕃山は尤も經濟の學に深くその議論は皆己れの實驗に出で敢て先輩の跡を踏まずこの學を慕ふもの今に至りて絕ゑずといふ蕃山人と爲り溫和にして仁慈能く人を愛せしを以て一度これに接するものは皆その德を慕はさるはなし家を治むること儉約にして高祿を食みし時と雖もその身の賤しかりし時を忘れず衣服飮食共に粗なるを用ひしといふ蕃山終に古河に幽死すと雖もその德より得たる「名譽は金剛石の如く闇にも猶その光輝を放てり」

○智惠ぶくろ　（角倉了以の事）

「智識は金銀財寶より寶しといふその智識は學問によりて得らるゝと雖もこれを世上有益の事に用ひざればその價値なきなり

角倉了以は京都の人なり慶長九年美作の國に至りしとき和計川の高瀨船を見て百川總べて舟を行るべしと思ひ直ちに嵯峨に還りて大堰川を泝り丹波の國保津に至りしに

湍石多くして僅かに筏の通ひ居るのみなれば斷じて舟を通はせんことを志し翌年その子玄之を江戸に遣はし幕府に請ひてその許を得たり

斯くて十一年の三月より工を起こし八月に至りて全く成れりその間の工事の有樣は道路に在る大石はろくろ索にて之を牽き水中にあるは高く足代を搆へ尖りたる鐵の椎を落してこれを碎き水上に出でたるは其の上に大篝を燒き水を掛けて之れを碎き河廣くして水淺き所は石をたゝみて水を深くし瀑あれば上を堀りて下を埋めて流を平にせり是れより丹波の世喜村と嵯峨の間に舟通ひて五穀鹽鐵木材石材など彼是有無を通じて居民その利を得たりといふ

十二年の春又命を奉じて駿河の國富士川を浚ふ此の川は最も急流なれども駿河の若淵より甲斐の國に船の通ふことゝなれり仍りて其邊の人々高瀬船を見て怪しみ且つ驚きて魚ならずしてよく水を行くと云へり十三年京都大佛殿造立あり大木巨石を運ぶに甚だ艱みしかば了以請ふて伏見の里より河に循ひて運送せり元來伏見の土地は大佛の基より卑きこと六丈なりとて其の道すがら高き所を穿ちて低き所に堤を築き又た河の廻れる所はろくろ索にて引き不日にして木石盡く達せり見る人皆怪しまざるはなかりき十六年又請ふて鴨川に船を通ず今の高瀬川是れなり誰れも斯ることをして世人の便益を謀ることを心がくべきなり

○積善の餘慶（細川忠興の事）

細川越中守忠興は謹み深く言語寡くして善き行ひ極めて多かりき其の豐前小倉の城主たりし時或る年非常の大旱にて五穀登らず殆んど餓死せんとする者多く且つ翌年の手當もなく奉行所へ訴へて憐みを乞ふ者夥し忠興大に憂ひて思へらく此の大災に臨み些少の救助にては偏ねく飢民を救はんことは望むべからず父幽齋より讓り傳へし和漢の名高き茶器を悉く出させその道に達せし家臣を召して『汝此品を京都に持ち行き買手を搜して賣り拂ひ來るべしと家臣急ぎて京都に行き其買手を見付けたれども皆當世の珍器なれば後日故障の起らん事を恐れて買ひ取る者

なければ之れを所司代板倉周防守勝重に伺ひ出でたり勝重の曰く此茶器は皆天下の名器にて由緒あることなれども細川家の所有物にて賣り拂はるゝ事に付きては毫も差閊なし買はんと思ふものは望に任すべし我等も早くより此の名器の事は聞き居たるが未だ現物を見たる事なし取引相濟みし上は一度見たきものなりと云ひしかば人々安心し富豪者は先きを爭ひて買ひ求めたり家臣は直ちに大坂に出で得たる金にて悉く米麥等を買ひ便船にて小倉に運漕し以て究民を救助したり是に於て名君なりとの令名天下に遍く後肥後國熊本城五十五万石の大主となり子孫永くその餘慶を蒙ることを得たり『珠玉玩器飢えて食ふべからず』忠興食ふべからざる玩器を賣て米穀に代へ飢民

に食はしめ珠玉玩器に易ふべからざる末代の名譽を得たり

○方位の指南者（伊能忠敬の事）

伊能忠敬は下總國佐原の人なり常に儉約にして奢侈を戒め凶年にあひてはその儲蓄を發して貧民を救助することをつとめたり忠敬天文算學に心を潛め西洋の歷學測量の術に達せり寛政十二年幕府召して全國の測量を命ず忠敬寒暑を厭はず嶮岨を避けず十數年を經て足跡海內に遍ねく終に全國を測定しこれを圖記して幕府に納めたり德川氏の末年まで精細の全國測量圖といふものあらざりしが忠敬出でゝ始めて我國の位置方位坐ながら指點すべきに

至れりその學問より得たる智識を以て進んで世を利益したるものにしてよく勅語の「學を修め智能を啓發し進んで公益を廣め」と宣ひし聖旨にかなへり

○盛饌に箸を下さず（奧貫友山の事）

已れ安樂なるときは人の難儀を思ひやりて善く身を愼み又應分の力を盡して人を助くることを心掛くべしこれ即ち「德器を成就す」るものなり奧貫友山は武藏の國河越の人なり其の家は父祖の代より農事を業とし頗る富裕なりしが友山は性來慈悲深き人にて諸人の窮困貧乏を救ひしことその數を知らず寛保年間關東洪水にて武藏の入間郡は甚しくその害を受け民屋水中に沒し數十里の間さながら

海の如くなりたり
友山斯と見て急に食物を舟に載せ下男等と倶々漕ぎ廻りて餓ゑたる者に飲食せしめ病める者をば悉くその舟に載せて連れ還り己が家に養ひ置くこと數百人の多きに及びたり因りてその父に請ふて曰く『大人の平生我等に節儉を行へと誨へ給ひしは今日の如き危急の事あらんが爲めと思はれたり疾く代々積み置ける米穀を出して救助に充て給はずや』と父これを聞き喜んで同意しやがて米倉を打ち開き大釜に粥を煮立て下男の中より謹直なるもの數人を擇びて其の事を執らしめて曰く『飢ゑたるものなりとて固より乞食にあらず決して慢ることなかれ』と戒しめたり下男等皆その意を心得て此の度は意外の洪水にて定めて難

儀なるべしされども凶歳のみにあらず豐年も來るべければ先きを樂みにして力を落すべからずと慰めて粥を與へ食し了れば壯幼を問はず人毎に米四升づゝ與へ總べて叮嚀に取り扱ひしかば飢民どもその厚意に感じ涙を流さゞるはなかりき
既にして儲へたる倉の米も盡しかば更に人を四方に走らせて米粟大豆蕎麥の類を買ひ入れしめ之を飢人に施したり然れども限りあるの金を以て限りなきの飢民に施すことなれば金も亦盡きたり是に於て父に請ひて田畑家作を江戸の富商に質入して若干の金を得其の年の十月より始めて翌年の四月に至るまで七ヶ月の間に施す所の村數四十八ヶ村救ふ所の人數十萬六千人に餘りたりその事官廳

に聞えて大に褒美せられたり
その彼河越侯秋元涼朝執政たりし時友山が慈惠の所爲を賞めて時服佩刀を賜ひ盛饌を設けて其の太夫等と伴食を命せしが友山は飯二椀と羹一椀とを食せしのみにてその餘のものに箸を下さゞりしゆゑ太夫等友山に向ひ『折角の馳走なれば』と勸むるに友山答へて『今四民は飢ゑ老幼は凍えたれば我等如き賤しき者斯る美味を食ふに忍びず是は王侯の召し上がる品なり』と云ひたり斯く自ら欺くことなきを誠といふ孟子が「誠は天の道なり誠を思ふは人の道なり」と云ひしはこの事なるべし

○孝悌の子は家の寶（綾部道弘の事）

綾部道弘も亦勤儉にして其身を修めたる人なり道弘は貧性剛直幼にして叔父の家に養はる然るに家人道弘の幼弱なるを侮りて無禮の待遇を爲しゝかば道弘は深夜潜に迯れ出で一里餘の原野を經て父母の家に皈りたり道弘時に年僅かに八歳なり父母大にその膽力に驚き是れより愛育尤も篤かりき一日試に古書を授け古言數百言を讀ましめしに一たび目を過ぐれば一句一言も忘るゝことなし父道一竊かに嘆じて『鄕に良師なく又家に貲財なく千里の名馬をして徒らに駑才に終らしむるは口惜しき限りなりと云へり

道弘また孝道に厚し年十七の時母を喪ひ號泣の聲日夜絕たず自ら沙石を運びて壙を築きたり十八歳のとき家貧し

きが爲め隣國に仕官したれども暇あれば時々歸省し餘力を以て醫書を學びたり又父に仕へて能く孝を致し毎に美味を以て奉養したり道弘の兄久しく病に臥し資產愈よ乏しく僅かの田宅まで質入するに至れり道弘これを憂ひその俸給を分ちて兄に與へ又その田宅を償還したり後兄の死するに及び二子幼稚なりしかば養育して終に成立せしむることを得たり道弘素より親族故舊に厚く如何なる難儀に遇ふも勞を辭せずして之れを救ひたり古人が「孝悌の子は家の寶なり」といひしは實に道弘の謂ひなり

道弘は性質剛直にして曾て非禮の物に近よらず不正の聲を遠ざけ長官重役と雖も常に直言して憚ることなかりき故にこれと交るもの何人も始めはその嚴に過るを憚れど

も久しくして終にその恩に感ぜしといふ常に自ら節儉を旨として華奢を喜ばずたま〳〵人ありて其の子に美服を遺りたり道弘これを服することを許さずして吾れ父曾て貧窮にして死せり吾れ又常に奉公意に任かせざりしを生涯の恨みとなす今幸に厚祿を受け兒女を養ふことを得るは皆父の恩惠なり況して人情の常として奢に傾き易く儉約は難きものなり予れ兒女を愛せざるにあらざるも願はくば奢侈ならざらしめん事を思ふのみと云ひしかば兒女は益す父の訓誡に感ぜしといふ

道弘は又善く刀劍の鑑定をなせしがたま〳〵其名刀たるを知らずして賣れるものあり道弘これを得たりと雖も敢て少しも私することなく其主を求めて之れを還せり道弘

が一生の行爲多く此の類なり老年に至り自ら好んで四書を讀み手にこれを放たざりき又國家前代の歴史名臣義士の事蹟その見聞する處歴々として暗記せり試みに卷を掩ひて尋ぬるに一言一句も澁り滯ることなし人皆その強記に感服せり道弘が強記は天性なりといへども所謂強記とは他なし勉強の別名なるべし

その子安正は江戸に在勤せしが道弘病に罹りたること遙かにこれに書を遣りて曰く『わが疾已に烈し思ふにこれぞ汝との永訣なるべし汝私情に引かれて假りにも公義を缺くてと勿れ若し必ず皈省することあらば吾れ汝を以て不幸の子とすべし』と又曰く論語は古今の常經なり一日も讀まざる事を得ず宜しく其道を守りて違ふこと勿れ予今に

及びて汝に告ぐることと只此事のみ又一言もの言ふべきなし汝吳々も心にかけて忘るゝ勿れと幾くもなく沒す年六十六

○智學を以て世人に德す（佐藤信淵の事）

經濟の學理を講じて農業の術を說き世人に大なる實利を與へたる『佐藤信淵は出羽の國雄勝郡の人なり通稱を百祐といふ家世々醫を業せしが代々意を農事の改良に用ひたり天明の大饑饉に際し父信季は道路に餓死する飢民の痛ましき有樣を見てこれを寫し百祐に與へ且つ誡めて曰く『汝經濟の學術を講究して多くの人命を救ふべし汝若し我が家に傳はる醫學を以て國君に見ゆることあらばこの圖

を示してその仁心を感發せしめよと百祐深くその敎に服せり

百祐天性英邁にして狀貌また偉大なり手を垂るれば膝を過ぎ掌中に紅色ありしかば家人これを呼んで紅掌君といふ好んで酒を飲み常に市中に行て或は放歌し或は人を罵り傍ら人なきが如し鄕人これを佐藤の狂兒と呼びて斥くれども更に意と爲さず一日父に從ひて山野に菌茸を狩る皈るに及びて悉くその得るところを棄つ父これを怒れば平然として『僅の菌茸何の益にも立たざるなり』といふ既にして山中日暮れ路に深林を過ぐ時に大なる狼あらはれ出で眼光電の如く爪を怒らし牙を鳴らして來り迫る百祐忽ち腰刀を揮ふて之れを斃し大に呼んで曰く我れ狼を

祈りたりし面色快きが如し父常に其の粗豪にして爭鬪を好むを憂ひ僧となして之れを矯め直さんと欲し寺僧某に託したり然れども朝夕佛事を修めず寺僧屢これを怒れば『われ虚談の僧徒たるを欲せず』と遂に机上の經典を投げ窃かに逃れて七高山の絕頂に至り食を絕ち神に祈る寺僧これを知らず唯だその逃れ去りたることを家人に報せり家人大に怪み普ねく人を遣はしてこれを搜し索むれども絕てその行方を知る者なし後ち十日間を經て一樵夫あり來りて幼兒は七高山にありと告ぐ父直に七高山に登り漸くその巔に達すれば忽ち朗々たる讀書の聲を聞く窃かに社殿の後より窺へば百祐なり父大に驚き且つ喜び急に出でゝ『汝何故に此處に來るや』と問ふ百祐『誓つて僧徒たらず』

と答ふ仍て遂に携へて家に皈り爾來ます〱學業を勵む年甫めて十三父に從ひて蝦夷に遊び奥羽諸州を周歷して見聞ます〱廣く十六歲にして父を亡ひしがその遺言に從ひ江戶に遊學し學業略ぼ成りて一旦故鄕に皈れり既にして時勢に感ずるところあり再び江戶に出で京橋に住し母を迎へて醫を業とす寬政の初め作州津山侯に見へたりしに侯問ふに富國の策を以てす乃ちその領內を巡視し氣候の寒暖より人情風俗に至るまで精密にこれを觀察し後ち弊政改革記二卷を著はし富國安民の大計を述べてこれを献じたり

信淵母に事へて孝養甚だ厚し母たま〱病に罹る種々に醫療を盡くし日夜寢食を忘れて看護を竭せしが遂にその

効なくして歿す信淵大に悲み愁傷措く能はず爲めに身体瘦せ衰へたりされど父祖の宿志を墜さんことを恐れ單身日本全國を周遊して我が家業を擴め國家の利益と人民の幸福を計らんとまづ西國に遊び諸國の物産を視察して實驗攻究し修學大に進みたり

幾くならずして有馬侯に召し抱へられその領内を巡視し筑後川水害防止の策を立て八頭牛の製法を施行せしが後ち水害の憂ひなく人々安心することを得たり又久留米藩播磨太夫の爲めに農學を講じ培養耕種の術を教へしが太夫その言を用ひしかば土地富有となり天災凶年に遇ふも一藩飢渇に苦しむの民なかりしといふ

又長州侯夙に開作の志ありて三田尻の海邊を新田となさ

んと欲し海面に長き堤を築きて潮水の侵入を塞ぎしが大風一たび起れば忽ち破る種々工夫を凝らせども良法を得ず信淵乃ち家傳の開作法を講じ勢子石を置くの法を教へてこれを施さしめ後ち果してその功を奏し大風起り怒潮來るも堤防を侵すの憂ひなく自在にその地を開作することを得初めは之を鹽燒濱となして土地を固め漸く新田と爲して開作耕種の法を施せしが次第に豐熟して米穀を産すること殆んど十八万石餘の新田となり亦鹽を燒き出すことも非常に廣大にして三田尻鹽の名世に高きに至れり

又尾張の學館に遊びて開作の業を講じ喜多郡及び宮より佐谷川迄を開作すべき事を説きしに某大に悦びて其教を奉じてこれに從事し後ち果して成功あり今に至るまでそ

の恵みを蒙り富裕の家となりし者多しまた大坂の豪家鴻池善右衛門をして三万石餘の新田を河州に開作せしめ巨万の富を致さしめたり故に鴻池家にては信淵の祠を立てゝこれを祭るといふ

信淵諸國を遍歴して多くの書を著せしがその最も世を益するものは農政の書にして之れに由て國を濟ひ民を利せしこと擧げて數ふべからず信淵嘉永三年病んで江戸に卒す明治十四年九月主上奥羽諸州を巡幸したまひし時信淵の事蹟叡聞に達し特旨を以て正五位を追贈せられたり

○乞食月仙貧民を救ふ（僧月仙の事）

昔伊勢國に月仙といふ僧ありしが畫に巧みにして當時その名を知らざる者なかりきされどもその畫を描くに價を求むること甚だ高く畫を請ふ者あれば必ず先づその價を定め潤筆の料意に滿たざれば謝して應ぜず故に又乞食月仙と稱せられたり此の如く人に毀られしも猶ほ畫を請ふ者は引續きて絶ることなかりき或る時一名妓使を以て畫を月仙に所望せしに月仙まづその使に向ひて直段を問ふ之を告げゝれば妓の曰く『直段はお望み通り差し上ぐべし』と月仙喜んで筆を下し畫成るに及び自らその幅を携へて至る折ふし妓客と宴す月仙を引きて酒席に就かしむ金を手につかみて席上に投げ月仙に與へて曰く畫を賣りて利を貪るさて〳〵賤しき乞丐月仙汝の畫は汚れて見るに忍びず』と斯く罵りつゝ自ら衣を脱して坐の中央に立

ちその禪を解きて月仙の畫をこれに替へ笑ひて『乞食月仙の畫はこれを壁に掛けるは不淨なりわが禪と爲せば足れり』といふ一坐の人皆口を開きて大に笑ふ月仙この有樣を見て少しも愧づる色なく却て妓に向ひ『よく似合たり』と口を極めて賞賛したり

月仙これよります〱その畫の價を高くしその獲る所積んで頗る富裕を致したり或日同じく畫を以て天下を漫遊する大雅といふ僧ありて月仙の家に泊せしが月仙を戒めて『無慾は釋迦の敎へなり然るに師は畫を以て價を貪り富裕なる暮しを爲すこれ師の恥のみにあらず天下僧徒の名折れなり願くは今日より行を改められよ』といふ月仙これに答へて『師の戒め誠に然ることなれども吾が畫を賣りて

價を貪る理由を聞きたまへ予は性來畫を好む然れども利の爲にするに前年凶荒にして世人飢饉に苦しむ折わが村尤も甚しわれこの時に於て初めて思へらく世人の書畫を玩ぶを見るに概ね富貴の家なりわれ今より後ち專ら畫を描きてその價を富貴の家より取りしに幸ひにも予の拙畫を請ふ者日に絕えずその價を積みしに既に五百金を得たり故にこれを山田奉行に托して此地の凶荒なる年貧民の救助に充てんとす既にわが望みは成就したれば畫の價を求むることを思ひ止まりしが猶ほ一つ止むを得ざることありわが伊勢の大廟に參詣するもの皆な道路の惡しきに苦むわが師僧の世に在りし時常に此の事を以て憂となせりわれ師僧の遺志を繼ぎて此の道路を修理せんと思ひ立

ちたるゆゑ又書を賣りて金を積み遂に三百金を得たり因りて道路を修理し險しきを平かにし狹きを廣くせしかば往來の者大にその便を喜べりわれ是に於て書の執筆を止めんとしたるに是れより先き師僧堂舍を修繕せんとし其志を果さずして死すわれ常にこれを殘念とす今や堂舍破れ壞れて柱傾き軒腐れたりわれ固と幼にして父母を喪ひ依る所なくして此の寺に投ず師僧われを憫みて鞠育甚だ懇ろなりき其誼を云へば師にして父母養育の恩を兼ねわれ師僧の恩を報ずるは此の堂舍の建築にありとなし更にこれが爲めに筆を執りて今日に至るわれ年既に老ひたればこのこと或は成らざらんを恐るゝのみ然れども幸はひにして達者なるゆゑ日夜筆を下して怠たらずその財略ほ

集まりたり思ふに三年を出でずして志願を達せんとす是れ等の事は則ち吾れ人の毀りに甘んじつゝ書を以て利を獲る所以なり今此の堂舍建築し了らば筆硯を燒きて心を淸らかにし釋迦の遺戒に從はんとするの時に至らば金錢何物ぞ月仙のこれを見る草芥と同じきのみ師請ふ吾が意を察したまへ』と云ひしかば大雅もその志に感じ世人の月仙を見る深からざることを嘆きたりといふ月仙が書を修めてその利を貧民に施こし道路を修理して公衆の便を計りたるは即ち勅語の業を修めて德器を成就し進んで公益を計りたるものといふべし殊に師恩の大なるを知てこれを報ずるに至ては閒然するところなし總て書を學び業を習ふはその師匠或は敎員の恩なり敎員師匠あればこそ物

をも知り道理をもわきまへわが智慧をも研き滿足なる人となるはその賜ものなり去れば常にこれを尊敬して尙ほ人我が足らざるところを學び得んことを心かくべし昔は君父師とて師をば君父と並べ稱して大切にしたる人多かりしか今の世には兎角敎員を輕んじ左までその恩を思はず卒業の後は路人の如く一禮をもなさゞるものあり大なる心得違ひといふべし

○敎師に對する敬禮（若林新七及增田鶴樓の事）

昔は己れより目上の人に對し禮儀を厚くする時には上下即ち禮服を着たるものなり若林新七といへる人の母は新七が其師に對し歳暮の禮を述ぶるに禮儀を缺かんことを

恐れ貧しきうちより麻上下をとゝのへて遣はし又新七が其の上下に綻をつけたるも師匠の用事を手助けしたる爲めなりと聞き師の用事には我身の損德を顧みず能く勤むべきことを敎へたるは誠に能く師の恩を知れる人といふべし

師は父母に代りて人たるの道を敎ゆるものなれば父母とひとしく敬ひ尊び一旦敎を受けたるときは終身その恩を忘るべからずされば釋迦も「師は人の大寶なり」と云へり增田鶴樓は賣藥を業とせしが幼き時新井白石を師として詩文を習ひ白石に愛せられて其名世に聞ゆ文人書家のこれを訪ふもの日に多きに至れり故に鶴樓は常に師恩を思ふこと甚だ厚く談たま〳〵學事に及べば必ず白石を稱贊

して『われ賤しき身分を以て公子長者の恩顧を蒙ること決して自身の力にあらず是れ皆白石先生の餘恩なり』と感涙を流せり白石が歿せし後ち談話中唯だ白石の名を聞きてさへ必ず涙をうかべ悲哀の狀をあらはせしかば人皆成るべく白石に關ることは言はざりしといふ

○徳行の感化（永田佐吉の事）

勅語に智能を啓發すと宣ひしは智力を發達せしむるをいひ徳器を成就すとは性行を修養して篤行の人となるをいふ永田佐吉の如きは徳器を成就したるものといふべし

美濃國羽栗郡竹鼻に永田佐吉と云ふ人あり性質温和にして義理をわきまへ己れは常に儉約を守り人と交るに慈愛

を以てせしかば時の人これを長者と呼びたり長者とは義理を稱たるなり

佐吉幼にして父を喪ひ母に養はれしが從順にしてその命に逆ふことなくねんごろに之を慰めたり長ずるに至りて孝養ます〳〵怠たらず常に云ふ『母の世に在る間心を盡して事へざれば一朝遠逝の後いかに悔ることも甲斐なし』と初め尾張の國に行て人の下男となりしが用なき暇には必ず沙を集めて字を習ひ又人に尋ねて書物の句讀を學び用あればまめやかによく働きたり然るに佐吉を猜む者ありて主人に讒言せしかば主人はこれを信じて佐吉を逐ひ出せりされど佐吉はこれを怨まず後ち尾張に行くことあれば必らず舊主の家を訪ひて安否を問ひたり是に於て主人は

己れが淺慮にて讒言を信じ此の如き忠實なる佐吉を解雇せしことを愧ぢたりといふ

佐吉の家は固より貧なり母は餅を商ひ己れは綿を賣買せり佐吉母に向ひ『わが家の餅はその形を小にすべし若し他の家より大ならば客爭ひて吾家に集り爲めに他人の商ひを損害することあるべし』と云ひしかば母は此言に從ひ餅を小にせり然れども人その志を知り買ふ者絶えざりき

佐吉また綿を商ひしが貧しくして尺秤を買ふ能はざりしかば綿を賣るにも又買ふにも人の爲すところに從ひて疑はざりしが人も亦その志に感じて欺かず却て買ふ者は少く取り賣る者は多く讓りたり佐吉の行ひ斯の如くなりしかば家業はいよ〳〵榮えて遂に不自由なき家柄となりた

り古語に終身畔を讓るとも一段を失はずとあるは此の事なり

佐吉は既に不自由なき身代となりしが儉約にして奢らず道を行くに米麥の遺粒あれば乃ち拾ひ置き雪の日鳥雀に與へて飢を凌がしむ人に對するに信切にして爭はず故に人々佛佐吉と呼びたり是れまたその德を稱するなり或る時佐吉金を携へて近江國より皈り夜に入りて山中を行きしに强盜數人に遇へり佐吉その言ふがまゝに金及び衣服を與へて少しも惜む色なくして『われ汝等の言葉に從ひたりされば汝等もまた吾が言葉を用ふるや否夜暗くして道に迷へり請ふわれを官道まで案内せよ』といふ强盜の一人これを承諾し佐吉を官道に誘ひ且つその住所を問ふ佐吉

その實を告げしかば强盜驚きて『君は竹鼻の佐吉長者にてありしか』といひ翌日彼の强盜は金及び衣服を持ち來りて佐吉に返し『佛佐吉の財物は奪ふべからず』といひ厚くその無禮を謝して皈りしといふ西人曰く「德行の勢力は身体の勢力に十倍す」とはこの事なるべし佐吉老年に至り佐吉の行狀領主の聞くところとなり米數石を賞與せられしといふ

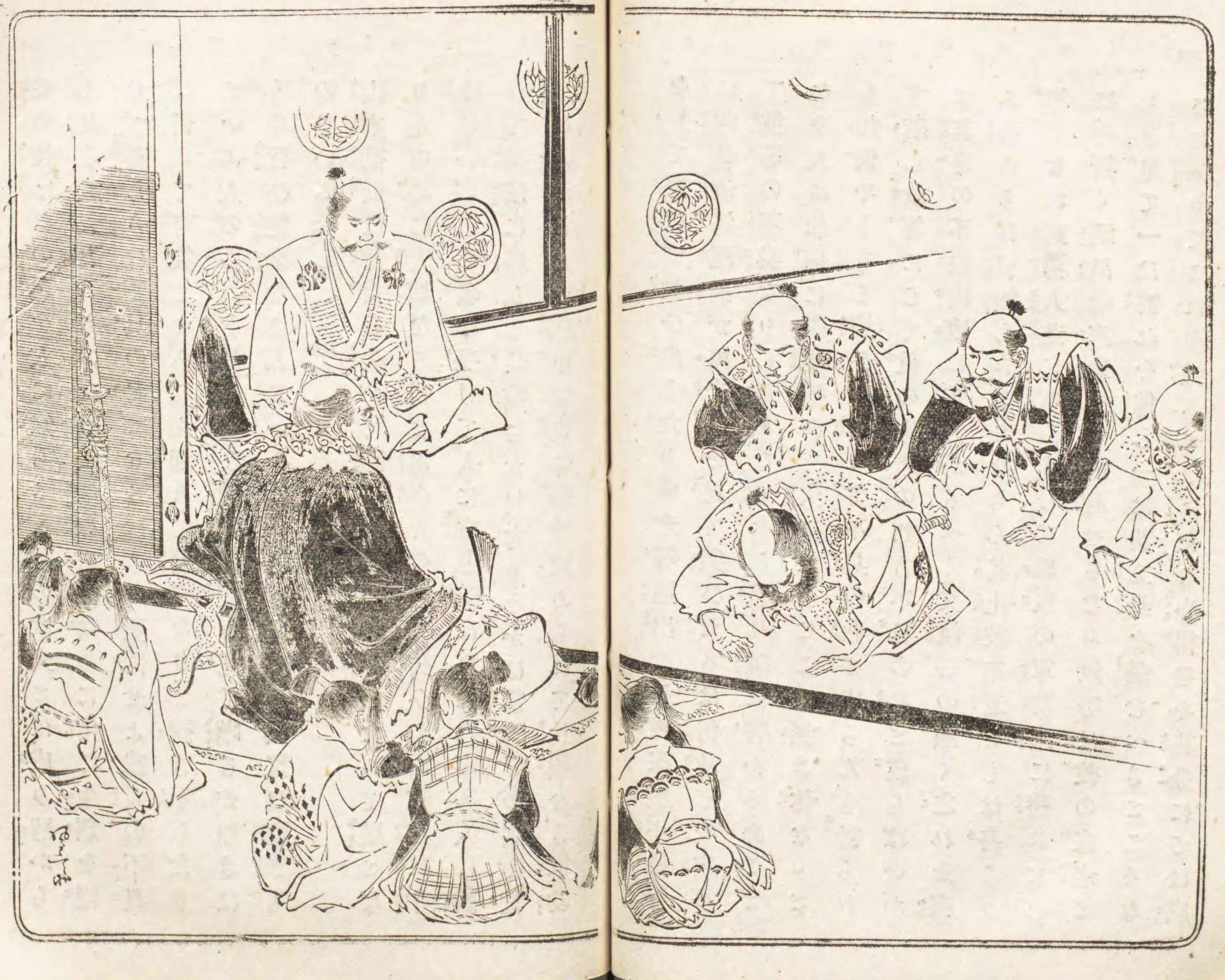
○不具の人反て不具を笑ふ（福島の家老と山本勘助の事）

人の此の世にある常に愛と敬との心なかるべからず我人を愛すれば人も亦我を愛し我人を憎めば人も亦我を憎む故によく人を愛するは自他の爲めなり此の愛の心を廣く

多くの人に推し及ぼし難儀あればこれを救ひ艱難あればこれを助くるを博愛といふ勅語にも「博愛衆に及ぼし」と仰せられたり又敬といふことも極めて大切なり敬ふ心なければ人を侮り輕んずる心生じ禮儀も亂るゝなり又人の容貌醜くして侮り嘲るものあれども是れ大なる心得違ひなり容貌醜きの人たりとも容貌全き人のおよばざる功名手柄を立つる人あればこれを蔑ろにして禮儀を失ふべからず

福島正則が安藝備後の二國を賜りたる時その答禮の爲め德川家康を訪ひたりその時三人の家老を從へしが其中福島丹後といふ者は跛にて次の尾關石見は三つ口他の長尾隼人は片目なりしかば家康の後ろに並居たる小姓等これ

を見て思はず笑ひ出したり家老等退出せし後家康小姓等に向ひ『汝等福島が家老共を見て笑ひたるは何故ぞや定めて彼等の不具なりし爲めなるべし是れ誠に善からぬことなり人は如何に平生揃ひて欠けたるところ無き体なりとも如何やうなる病ひに罹りて不具の者と成らんも計られず若し汝等にして彼の家老の如き不具の身と成らばいかに其身の不自由實に苦しかるべく又汝等の如くこれを笑ふ者あらば口惜しきことならん其上彼家老どもは身こそ不具なれ武勇人並にあらずして數度の軍功衆に勝れたれば今斯く福島の家老まで立身せるなり汝等は彼の家老どもを見て一は憐れを催し一は其立身を羨むべきところなるに却りてこれを笑ふとは何たる心得ぞや其分にては成



長の後己れの名を人に知らる丶程の武夫とは成り難から
ん凡そ武夫たるものは其武術を研く爲めに常に生創を絶
たず甚しきは不具の身となるべきを覺悟せよ武人の不具
は何とて可笑こことあらん却りて名譽なり』と說き示したり
といふ人の不具を見て笑ひ醜き容貌を見て嘲るが如きは
その行ひ完全なる人といふべからず却て不具又は醜きも
のといふべし

山本勘助は片目を失ひて眇となり片足をいためて跛とな
り人の身に大切なる目と足と各々半分を失ひしかば遂に半
体といふあだ名を受けて人に嘲り笑はれたれども人に勝
れて兵法に精しく武術にたけたりしかば當時その名を世
上に轟かしたる武田信玄に擧げ用ゐられて比類なき軍功

を顯はし丶かば初め嘲り笑ひし人も皆面目なく思ひ却て
勘助を賞めうやさぬ者なきに至りたりされば人は容貌の
如何にか丶はらず智を研き心を磨きて德器を成就するこ
と肝要なりと知るべし先哲曰く「言を愼み行を篤くするは
身を修むるの道なり」と

世の中に虎おほかみは何ならず
人の口こそなほまさりけれ　（月清集）

人のうへいふより科のおこるぞと
思ひ出してふかくつ丶しめ　（最明寺敎訓百首）

人の上いふ人あらん坐敷をば
用ありがほにいそぎ立つべし　（同上）

○堪忍袋（大石良雄及平澤某の事）

學問を強勉して人間たるの正道を辨へ有爲の人物となるには種々の方便あれども堪忍も亦性行を修養するの一なり古人も「出來る堪忍誰もするならぬ堪忍するが堪忍」といへり人は我が氣に入らぬ事我心にかなはぬ事あれは動ともすると疳癪を起し易きものなれども疳癪は禍を招き易し何事も能く堪忍すべし腹の立つ事柄にても能く堪忍して其時を過して見れば短氣を出さゞりしを嬉しく思ふこと多きものなり

昔し支那に韓信と云ふ人あり或る時市場にて悪る者共に取圍まれ散々辱しめられ遂に胯の下をくゞれと強いられ

たり其時韓信は實に堪へ難く思ひたれども後來大なる志を懷き居る身なれば其塲にて惡る物共と爭ひ鬪ふは犬死同樣なれば爰は堪忍の爲し所なりと思ひ定め遂に胯の下をくゞりたり當時は人の笑ひを受けたりしが其後段々立身して大將となり屢ば大敵と戰て之れを破り名を天下に轟かしたり堪忍は誰も斯くあるべきなり今我が國にて堪忍强き人の事實を二つ三つ次に揭ぐべし

大石良雄は播磨の國赤穗の藩士なり元祿中藩主淺野長矩江戸の城中に於て吉良義英に辱しめられ怒りてこれを傷つけ其罪によりて死を賜はり城地を召し上げられたり良雄深く遺憾に思ひ主君の仇を報せんとて同志と謀り己は京都に上りて時機を待ち居たり

當時世間にては良雄が仇を報ずる志ありとの評判ありしかば吉良家にては用心甚だ嚴重なりき良雄の評判を打消し吉良家の備へを緩くせんがため殊更に酒宴遊興に耽り居たり一日島原の或家に遊び居たりしとき薩摩の人喜劍と云へる者亦此の家に來れり素より良雄とは一面識もなき中なりされど良雄の仇を報ずる心もなく遊蕩に日を送ると聞きて心甚だよろこばず良雄を招きて酒を酌みかはし報仇の事を夫れとなく勸めたれども覺れる氣色見へず更らにあからさまに言へども唯打ち笑ふのみにて受け引く樣子なかりしかば喜劍こらへず目を怒らして大に罵りて曰く『汝は犬猫にも劣りたる者なり汝が主人は切腹を申付られ城地は召し上げられしにあらずや汝らの家人に

てありながら仇を報ずることをも知らず遊興に耽るは何事ぞ犬猫同前の奴なれば犬猫の取り扱してくれん』と左の脚の甲に指身を載せいさ食へと云ひて良雄の前に出す良雄俯向き口にて受けて食ひ畢り甲に着きたる汁をも舐め盡し少しも恥る色なし喜劍呆れて去る良雄は斯かる無禮をも克く忍びしが後江戸に下り同志の者四十六人と共に吉良氏の邸を襲ひ義英を殺して遂に多年の本望を遂げたり喜劍これを聞きて大に慙ぢ良雄の死を賜ひし後ちの墓に詣り罪を謝して自殺したりといふ良雄が國法を犯して主人の仇を復せし其の所爲は稱するに足らざれども其の志は實に稱すべきものなり殊に常人のしのぶこと能はざる所をしのびて其志を遂げしは所謂「しのぶことあればよく濟

すことある」ものなり

人昔徳川氏の時世に平澤某といふ武士あり能く堪忍を守りたりある日の朝主人の用向のため從僕を召し連れ他行せしに或る家の二階にて齒磨をつかひたる唾を道に向ひて吐きたるものありたま〳〵通行せる平澤の衣服に飛び掛りて禮服を汚がしたれば其從僕大に怒りて其の家に入り唾を吐き掛けし者を引き出さんとせり平澤これを止めて暫く此の家を借るべしとて頓て其の家に入り挾箱より着替を取り出で、着かへしかば其の家の者ども之れを見て皆出で、其の無禮を謝したり平澤少しも怒る氣色なく『人誰か過ちなからん只だ此後に氣を付くべし』と云ひて出で行きぬ從僕口惜き事に思ひ『何故に彼の儘にて赦されし

か』と問ふ平澤の曰く『我が常に心得とする所の耐忍は此時に必要なり今日は大切なる主命を帶ぶる身なり斯かる細事の爲めに時を費すべからず』といへり其の後私用のため供人を連れて外出したるに夏の頃なれば町の者溝川の汚水を打ちしが或家の打ち水平澤が袴の裾をけがせり供人ども之れを見て大に怒りて其水打つ者を捕へ已に打擲せんとするを平澤押し止めて行き過ぎければ供人ども『彼の無禮者を赦さるゝは武士道の本意にも背き殘念至極なり』といふ平澤これを戒めて『否さにあらず吾れ今日は私用にて外出す苟も士たるものは君命の外私の爲めに人を罵詈すべからず之を詈罵せば武士道の本意に通せざる者と云ふべし只耐忍せよ耐忍だにあらば天下に恥辱の事なから

ん』といへり人誰か怒りなからんこれを堪へ忍ばずして顔色にあらはし荒々しき言葉をつかふときは心の淺墓なるを人に見透さるゝなり故に諺にも「短氣は損氣」といへり

○禮儀の國

我國は君子國と稱せられて昔より禮儀を重んずるの美風あり凡て人に交るには常に禮儀を正しくすべし人に對して禮儀正しからざれば他人の親みを得ること能はずされば起居進退の間も忘るべからず若し人に禮儀なきときはいかに才藝ありと雖も喧嘩爭闘やまず禽獸にひとしかるべし酒井讃岐守一日眞田伊豆守に向ひ『貴家は軍法を傳來と聞けり國家の爲に願くば軍法の奥儀を傳へられよ』とい

ふ伊豆守答へて『別に軍法の要といふものなし只だ禮儀あるを軍法の要となす』といへり戰陣すら禮儀を重んずまして日常の禮を守らざるべけんや禮儀を守るには起居を正しくし荒々しからず輕々しからぬ樣に注意し衣服も亦正しく着て亂さゞること勿論なり今その例を擧ぐれば安藝の國に賴春水といふ學者ありよく禮儀を守り行狀を愼みし人なりしが平生傍に在る妻子といへどもその惰れる容を見しことなし衣服を着ること正しくして久しく着たる袴羽織のひだ折目などもそのまゝに少しも亂るゝことなかりき

又源隆俊は宇治大納言隆國の子にして能く禮儀を守りし人なりその權中納言たりし時殿上に參り衣冠を正しくし

手に笏を執り正面に向ひて眞直に坐し居たりたま〱後三條天皇小蔀の隙よりその樣を叡覽ありて隆俊は能く禮儀を守る無双の者なりと褒めさせ給へりこれ禮儀を守りしものゝ一例なりこれに反し侍從大納言成通と云ふ人あり或る時白河天皇の御陪膳に侍りしに天皇の未だ出御ましまさずして漸く時移りたるがため足痺れしかば片膝を立て居たり後三條法皇此の樣を叡覽ありて『人の前はて立膝して居ることは無禮なり』と宣ひしかば成通聞きて大に驚き狼狽てその場を逃げ去りしといふ古人も『容貌辭氣は德の符なり』といへりされば須臾も行儀を乱さゞるやう心掛くべし西諺に『曲れる木に直なる影なし』といへるも行儀の惡きを戒めたる言なり愼まざるべからず

○二士功を讓る（山内治太夫進士清三郎の事）

古語に曰く「德は遜讓より美なるはなし美德は仁者の行なり」と人の行ひの中己を卑しうして人を貴び己を損して人を益するを遜讓といふこれに勝りたる美德あることなし

松平康重の家臣に山内治太夫進士清三郎といふ二人の士ありたり康重武田氏と戰ひて大に敗る時に山内進士の二人交る〳〵殿して退きしが山内の矢盡きたるを見て敵將山縣源四郎これを追ふこと甚だ急なり清三郎一矢を分かちて治太夫に與ふ治太夫喜びて踏み止まり之れを以て前に進みたる敵兵を射たるに其の胸を貫きて後なる松樹に達すこれを見て敵その勁弓に恐れて引き去りたり

後ち山縣らの矢を康重に送りて曰く「善射無雙なり」と康重矢に清三郎の姓名をきざめるを見て之れを褒めんとすれば清三郎曰く「これ治太夫が放ちたる處なり又治太夫を召して之れを問へば清三郎が發するところなり」といひて互に相讓りて決せず康重らの謙讓を嘉して共に兩人を褒賞せり西語に曰く「君子は人生毎日の小事に於ても己を棄て人に讓り己を損して人を利するものなり」と何人もこの心掛けなかるべからず

○損して得とれ（菴原助右衛門の事）

人は皆己を愛し身の幸ひを望まざるものなしされど多くは驕と爭との二つにて身を亡ぼす身を立て幸ひを求むる

は謙と讓との二つに在り古語に「謙は益を受け滿は損を招く」といへり井伊直孝の臣に菴原助右衛門といふ人あり性質寡欲にして已れが功に誇らず却て他人を憐れむこと厚し直孝の家康に從つて大坂城を攻むる時前軍利あらずして川手主水山口伊豆等の諸將多く戰死せしが助右衛門亦一方の將として衆を勵まし奮戰して重成の兵を破り進みて重成にせまり之れと戰ひて遂にその首を斬れり時に直孝の近臣に齋藤助三郎と云ふ者あり助右衛門に向ひてその首を求む助右衛門辭する氣色なく之れを與へて「吾れ此敵と戰ふに彼れ自ら名を稱す曰く木村重成なりと今これを檢するに果して其言の如し君これを以て功と爲せよ」と助三郎喜び勇みて其首を携へ去らんとす助右衛門注意して曰く「その首を持して將軍の檢閲に供ふ時他の證左なければ信せられず」と因りて重成の母衣を裂きて首をつゝみ其帶刀をも幷せて携へ行かしむ助三郎之れに因りて名を著はし重賞を家康より得たりといふ木村重成は智勇兼備の名將なり然るに助右衛門は單身之れと戰ひてその首を斬る功名固より大なり然るに他人の乞ふに任せて之れを讓り毫も惜める色なし江海の量ある人にあらざれば能はざる所なり

爰に又榊原康勝の家臣に黑田彥左衛門と云ふ者ありしが德川家康の豐臣秀頼と大坂に戰ひし時彥左衛門も亦主人に從ひて家康の軍にあり或る日の戰ひに彥左衛門一甲士と引組みて之れを仆し既にその首を切らんとしたるに同

輩なる三枝勘兵衛といふ者馳せ來りて已れが功名になさんと思ひ彦左衛門に向ひて妄りにその首を爭ひたり彦左衛門更に惜める色なく打ち捨てゝ行き過ぐるを勘兵衛さすが心に愧たりしか聲を揚げて『少しく待たれよ言ふべきことあり』と呼はりしが彦左衛門聞かざる眞似して馳せ去りたり

後ち大坂城陷りしがたま〳〵榊原康勝病死したるを以て家康より久世廣之阪阿廣勝の二人に命じ其家臣の軍功を調べしめしに彼の勘兵衛一個の首を持ち出で丶是れ黒田彦左衛門の獲たる所なれども彼れ打ち捨てゝ去りしかば吾れこれを拾へり宜しく彦左衛門を賞せらるべしと云ひしかば即ち彦左衛門を召して其事を問ふに知らずと答ふ

勘兵衛の曰く『君は槍を以て此の敵を殪しながら吾が後より來るに會し即ち捨てゝ去りしにあらずや因りて吾れ之を拾ひ置けり君何故なれば知らずと云ふか』と詰る彦左衛門頭を左右に振りて曰く『聊かも君が言ふ所の如きことを覺ゑず』と此事家康に聞ゑければ彦左衛門の謙德ありて功に誇らざるのみならず之を人に讓るの寛大なる志を察し深く嘆賞せりといふ古語に曰く『謙は自からくらまして德ます〳〵光る』と蓋し之れの謂ひなり

○儉約と良馬　（成瀨正成及水戸景山の事）

古人曰く「用を節して人を愛す」これは無益の費を省きて人の爲めに不時の用を辨する事をいふなり成瀨正成といふ

人あり或時父正一の許に至り『父君は御老年のことなれば是れにて口に叶ふものを召し上れと云ひて銀子二十枚を渡したり然るにその父は其の銀子を受け取り袋に入れて坐右に吊し置き美食の欲しき時は其の袋を眺むるのみにて少しも用ひず貯へ置きしが大坂冬の陣の時正成とその弟に向ひ『來年は徳川氏も出陣せられ兩人も定めて從軍するならん斯かる時こそ良馬を求めて乘れと云ひて彼の銀子を二つに分け十枚づゝを兩人に與へたりといふ

肥前國主鍋島閑叟年若かりし時水戸中納言景山の賢明なるを聞き常にこれを慕ひ一たび面會せんことを願ひ居たり其江戸に至るに及びて始めて殿中に於て之れを見親しく言葉を交はし一日その邸を訪ふて物語りすべしと約し

たり既にして其期日に至りしかば閑叟は早朝に己れの邸を出でゝ小石川の水戸邸に景山を訪ひたり景山自ら之れを坐に招し四方山の物語などしたり然れども少しも賓客の待遇は更になく唯だ茶菓を出せしのみ閑叟は大名の家に生れ家臣等に敬ひかしづかれし身なればその接待の厚からざるを不平に思ひたれども元と我れより謁せんことを乞ひしことなれば少しも不平の色を形はさずして其說を聞き居たり時移りて日暮になりしかば景山侍臣を呼び命じて飯を進めしむ侍臣程なく膳具を持ち來りしに皆淡き羹粗末なる菜にして一つも閑叟の如き大名の口に適ふ者なし閑叟心中益す不平にして竊かに思へらく我れ久しく此の人の令名を聞き日夜慕ひて今始めて相遇ふことを

得其聲名の虚なりしを知る凡そ儉約は人の必ず行ふべき事なれども其極吝嗇に陷り禮儀を失に及びては誤れり且つ天下の大名たる者日を定て訪問するを約せるに接待の用意もなく此の如く冷かに待遇する事實に水戸の家柄に不似合なり我れ再び斯る人を見ることを好まずと聽て暇を告げて立出しかば景山自ら送りて玄關に至りぬ其時玄關の前に金服輪の鞍を置き毛色美々しき駿馬を繋しが人の來しに驚き一聲高く嘶きたり其勢ひ實に勇々しかりき閑叟これを觀て大に感じ誠に稀世の駿馬なりと覺へず嘆賞したり景山曰く『偶々貴賓の來駕を辱ふせしも別に一物の進むべきなし此馬は我れの常に乘れる所のものなり甚だ無禮の至なれども之を貴所に献ずべし國政の暇に遠路を

試み給へと閑叟大に喜び且つ先きに賤みしを後悔し始めて景山が時の勢ひに連れずして驕を省き用無き事を儉約にし有用の事に吝さかならざるに感じ又世人の賞むるに違はざるを知り其れより後父の如くに慕ひ交りしといふ凡そ人たるものは景山の如く無用の費を省き有用の事に使用し能く節儉と吝嗇との區別を辨へざるべからず兎角節儉と吝嗇とは取違へ易きものなり費を省きて金錢財寶を多く儲ふとも有用の事に吝みて用ひざれば守錢奴と辱らるべし西諺に「灰吹きと金錢はたまる程きたなくなる」とは旨味ある言葉なり

○慈善の義捐金　（橋本松齋の事）

「此世にて物の少しもちたきは貧しき人にほどこさんため」といへる歌は最明寺教訓百首の一なり人の此の世に生れて儉約をつとめ財物を儲蓄するは有益の事業に用ひ且つ貧窮を助け艱難を救ふが爲めなり財多しといへども徒らに吝みて人を助け救ふことに用ゐざれば人たるの本分に背くものなり肥後國加藤家に仕へたる稲生某の子に松齋と呼ぶ者あり寛永九年加藤家にその領地を没収せられし時父に從ひて肥後を去れり松齋時に十三歳なりき其より京都の嵯峨に住ゐしが父母歿するの後は專ら慈善の事に心を用ひ身を忘れて世間の薄命なる者を救ふことに力を盡し己が財物は毫も惜まず毎年米麥又は粉米の如き物を多く買ひ集め置きて凶年の時飢餓に苦しむ者に施し又

平年にても貧窮なる者と見れば遠近を問はず之れを持ち行きて施せり「世間第一の善事は難をすくひ貧を憐れむに若くはなし」と古人の言ひしは松齋の謂ひならむ

松齋近傍の農民田畠の稼ぎに暇ある時は徒らに遊び暮すを見て繩を造らせ之れを買ひ置き秋に至りて彼等が稲を束ぬるため繩を要する頃これを出し價を安くして賣り與ふ又澁を買ひて紙を堅め村の女の年老ひて田畠に稼ぎ難き者を集め賃錢を取らせ其澁紙を縫はせ紙衣として貯へ置き冬に成りて衣服なき貧民又は乞食に施したりその他一年中人々に金錢物品を施すこと夥しかりしといふ

松齋父の遺金多くありしかば之れを富める家に預け置きその利を以て斯る救助の資に充て己れは儉約をまもり飲